

316

38

Das Wesen des Christentums.

基督教とは何ぞ也

獨國伯林大學總長ハーナック博士著
日本神學士 高木天太郎譯註

東京

警醒社書店

Das Uebers des Christentums.



基督教とは何か也

獨國伯林大學總長ハーナック博士著
日本神學士高木天太郎譯註



東京 警醒社書店

凡例

此書も「護教」の讀者に著者所論の大要を紹介せんと
して稿を起し、中途一冊となして世に公よせんとした
るもの、其純粹の翻譯に非ざるは之が爲め也。其前半に
於ては稍や省略を加へたる處なきに非すと雖も、其後
半に至ては原著の儘を存せり。之を譯註と稱するもの
譯者間々附するに評論と註釋とを以てせるが爲め也。
後學妄りに先進大家の著書を毀傷す、其罪素より大也。
原書もと十六回の講演より成る、之を數十回に分ち一

々主題を附したるは譯者の微意のみ。
 原著出でより既に二年、甲是乙非未た其底止する所
 を知らず。假令其言ふ所悉く眞なること能はずとする
 も近來出色の大文字、其英譯の如き既に二版を重ねる
 に至りしと云ふが如き亦以て此書の歐米諸國に於け
 る地位如何を知るべし。蕪雜の此譯書聊か我國思想界
 に補益を與ふるとあらば譯者の幸甚た大也。

明治三十五年五月

譯者識

基督教とは何をぞや

目次

一	アドルフ・ハーナック	一頁
二	此問題を研究するの必要	一〇頁
三	研究の方法	一四頁
四	福音書の歴史的價值	一九頁
五	奇跡論	二四頁
六	耶穌の歴史と教訓	三〇頁
七	パプテスマの約翰	三六頁
八	耶穌の使命	四六頁
九	神の國と其來る事	四九頁
十	父なる神及び人類無限の價值	五九頁

十一 最高の義及び愛の誠 六七頁

十二 福音と此世との關係即ち棄世主義の問題 七六頁

十三 福音と貧者との關係即ち社會問題 (上) 八八頁

十四 同 (下) 九四頁

十五 福音と律法との關係即ち秩序の問題 (上) 一〇六頁

十六 同 (下) 一一六頁

十七 福音と工作との關係即ち文化の問題 一二四頁

十八 福音と神の子との關係即ち基督論 (一) 一三三頁

十九 同 (二) 一四二頁

二十 同 (三) 一五三頁

廿一 同 (四) 一五八頁

廿二 福音と教理との關係即ち信仰箇條の問題 一六五頁

廿三 使徒時代に於ける基督教 (一) 一七三頁

廿四 同 (二) 一八〇頁

廿五 同 (三) 一八九頁

廿六 同 (四) 一九九頁

廿七 同 (五) 二〇八頁

廿八 公同教會の發達 (一) 二二〇頁

廿九 同 (二) 二二八頁

三十 同 (三) 二三四頁

卅一 同 (四) 二四三頁

卅二 希臘教會に於ける基督教 (一) 二五二頁

卅三 同 (二) 二六四頁

卅四 同 (三) 二七六頁

卅五 羅馬教會に於ける基督教 (一) 二八七頁

卅六 同 (二) 三〇一頁

目次

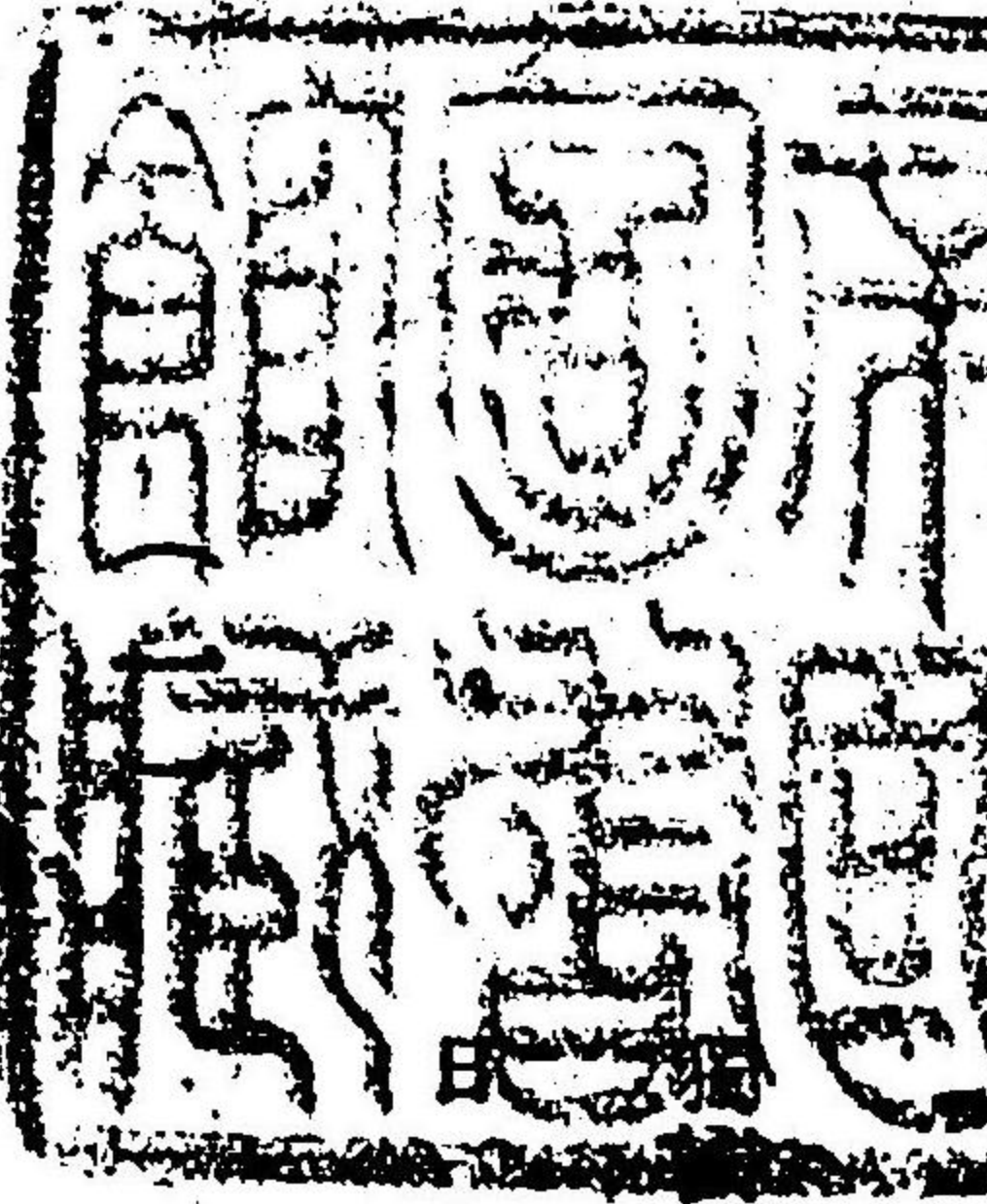
卅七 プロラスタント教に於ける基督教 (一).....三二四頁

卅八 同 (二).....三二六頁

卅九 同 (三).....三三四頁

四十 同 (四).....三四四頁

基督教とは何ぞや



伯林大學總長博士 ハーナック原著

本 パチエラー、オフ、
デグイニチー 高木壬太郎譯註

アドルフ、ハーナック

「基督教とは何ぞや」是れ伯林大學總長アドルフ、ハーナックが一千八百九十九年の末より翌年の初に至る冬期間伯林大學生に向ひ基督教の要點に關し講演したるもの也原書題して「基督教の本質」といひ、英人トーマス、ペーレー、サンダース之を英譯し題して「基督教とは何ぞや」と云ふ吾人一本を購ひて之を讀むに議論創始的にして思想深遠文理明

アドルフ、ハーナック

白にして加ふるに津々たる靈的趣味を以てす、吾人の信念を益したること誠まことに少しとせず。世評せひやう噴々として大に世人の注意を喚起し、洛陽の紙價しにか爲に貴たかさの觀くわんあらしめたるもの蓋けだし故なきに非ざる也。聞く處に依れば伯林に集會せる牧師會議は此著書に對し一種の決議案を通過し、此書の歴史的事實を誤れる旨を公言したりと云ふ。凡そ何の書か悉く眞理なるものあらんや。古人も云はすや「悉く書を信せば書なきに如かず」と。吾人は素よりハーナックの所言に「悉く感服する者に非ず。然れ共之を大体より論すれば議論堂々として信念甚だ盛に、基督教の爲に萬丈の氣焰を吐きたるものと云ふべし。吾人は今之れを翻譯して、間々加ふるに卑見を以てし、世人と共に其利益を分たんとす。吾人は今之を爲すに方り、先づ著者の何人たるかを讀者に紹介するを以て最も便利也と信す。

アドルフ、ハーナックは一千八百五十一年五月バルチック州立大學の

所在地あるトルバットに生る、父をセオドール・シアス、ハーナックと云ふ。久しく同大學應用神學の教授たり、博學にして且嚴格あるルーテル派の神學者なりき。アドルフ、ハーナックは一千八百六十九年より同七十二年に至るまで同大學に在りて神學を學び、殊に歴史學の研究に於て教授エンゲルハートの大なる感化を蒙りたり。後ハーナックはライプニッツに來り、神學士及び哲學博士の學位を受領し、且同大學に於て神學及び教會歴史の講坐を擔任する事となれり。彼は教會歴史を講義するに方り通常歴史家の採用する方法に従はず、新約聖書序論、ノスタツク派、猶太教及び基督教の默示録、ユーセピアス、初代基督教文學等の特殊なる問題のみに就て數年間講演を續けたり。一千八百七十六年ライプニッツ大學の助教授に擧げられ、同七十九年ギイセン大學教會歴史の教授となりたり。此時彼れ齡僅に廿八歳、此壯齡を以てして此榮位を占む、獨逸國に在ては稀有の例也となす。而かも彼が才名は噴々として

高し。

ハーナックがライプニッツに在りし時、公にしたる著書の中最も有名なるものを『アベルスのノスタック教』及び使徒的教父著書の編纂也とす。後者はオスカル、ボン、ゲフハート及びセオドア、ザン教授と功を共にせるものにして、註釋を附せるものと附せざるものとの二種あり、今日に至ても尙普く國中に行はる。彼、ギイセンに留まる事七年、ゲフハートと共に『基督教初代文學歴史の本文及び其研究』と題せる不定時刊行物を公にし、初めたるは此時期也とす。此書中には新約全書及び教父に關する頗る長編の論文を載す。初代基督教文學の研究に貢献したる事甚だ少からず、ハーナックが『ダイダック』及び其研究の結果を公にしたるも亦此書に在り、實に此書は基督教文學の研究に最も重要な寄與を爲したるのみならず、世人をして之れを研究するの精神を養はしめたる効亦甚だ大也。夫の英國ケンブリッジ大學に於て出版せる『本文及

び研究』と題せる刊行物の如きも亦實にハーナックの此書を模倣せるもの也といふ。

ハーナックの最も有名なる著書を『基督教歴史』と爲す。千八百八十五年其初卷を公にし、千八百九十年第三卷を公にして以て之を完成せり。此書に依りて彼れが神學上の立場は明となれり。彼の所謂『ドグマ』とは基督教の思想を概稱するの言葉に非ずして、基督教の初代に於て其萌芽を發し、第四世紀に於て教會の採用する所となり、尙發達して宗教改革の時に至れる教理の系統を指せる也。彼の信する所に依れば、此教理の發達は基督教の信仰と希臘思想との混和せる結果にして、其中には元來基督教の本質に屬せざる分子をも含有すれば、新教徒たるものは唯之を批評するの自由を有するのみならず、又之を批評せざる可らざる也。由來新教徒は適當に『ドグマ』と稱するものを有せず。彼若し獨斷的基督教の信徒と同一なる信仰を有せば、是れ彼が基督に於ける信仰の結

果爰に至れるにて、教會の信條なるが故に之を信するには非ず。ハーナックはアサナシアスに對して最も深厚ある同情を有せり。彼若しニカヤの宗教會議に列席したりしならんには勿論アサナシアスに左祖したりしなるべし。然れ共彼はニカヤの信條を以て満足に基督教の眞理を表明せるものなりと信するものに非ず。唯比較的正当也とするに過ぎざるのみ。彼は屢初代に於ける基督教「ドグマ」の發達は決して退化に非ずとの事を論じ、且發達は必然也、或教理を以て永久不變の者として固守するは誤謬の甚しき者也と云へり。彼は希臘神學を好まず。思ふに是れ彼は之を以て宗教よりも寧ろ形而下及び形而上學の諸問題に關するもの多しと思惟すれば也。アウガスタンは羅馬教理の基礎を置きたる神學者ありしかども、彼は凡ての神學者中に於て獨りアウガスタンを崇拜せり。其故他なし、彼の信する處に依ればアウガスタンは神學の中心を思辨より信仰に移し、基督教の敬虔を法律的畏懼より神の恩

惠の信頼に移し、有限よりの救に代ふるに罪惡よりの贖を以てしたれば也。

ギイセンに在りし時ハーナックは又エドウイン、ハッチの「初代基督教の構造」と題せる書を翻譯せり。ハッチが獨力研究の結果殆どハーナック研究の結果と同一なるものありしは甚だ奇也といふべし。當時ハーナックは又教授エミル、シューレルと共に「神學的文學評論」と題せる雜誌を刊行せり。彼が神學書に對せる銳利ある批評は主として此誌上に掲載せらる。

千八百八十六年ハーナックはマルバルク大學に轉じ居ること僅に三年、千八百八十九年保守説を主張せる教會牧師等の劇甚なる反對ありしに拘はらず、遂に移て柏林大學の教授とあれり。彼が「紀元二百年頃の「新約全書」と題せる一小冊子を公にしたるは此頃の事也。此書は教授オドリア、ザンが福音書の或註釋を第二世紀の記者に歸したるを批評

したるものにして、兩者の争論は爾來長く相續けらる、而して多數の學者はハーナックを以て正當なるものとなしたりき。

ハーナックが伯林に移りて後企てたる一大計畫はユースピアスの時に至る迄著はされたる希臘師父の書冊を刊行する事と、初代基督教文學の歴史を著述する事となりき。彼は既に廿有餘年の間各所の大學に在りて許多の學生を教授したる事なれば、其門下よりは既にルーフス、ムーラー、クルーゲル等の有名なる學者を輩出せしめたり、而して彼等の門下亦各許多の秀才を出したることなれば、ハーナック感化の及ぶ所甚だ少からず、彼は此等諸學者の助を用ゐて此大事業をあしつゝ、ある也。

使徒信經に關する争論はハーナックが伯林に移りたりし後、彼の名と共に聯想せらるゝ出來事なりき。彼の説に従へば使徒信經は基督教徒信仰の標準としては不満足たるを免れず。故に彼は適當なる序文を附して之を使用するか、然らずんば更に簡略なる信仰簡條を造るべしとの事を勸告したり。此説は大に世人の注意を喚起し爾來之が可否を論ずるもの甚だ多く、今日に至るも未だ其決する處を見ず。

人或はハーナックを以てリツチエルの徒となすものわれ共是れ大に誤れり。ハーナックの勉めんとせる所のものは第一、新約全書及び教會歴史の自由討究、第二、思辨的神學の排斥、第三、實際的基督教に於ける深厚なる興味是也。新約聖書文學の問題に關してはハーナックは他の多の學者よりも保守的也。彼は哥羅西書、以弗所書及び腓利比書の保羅の書翰たるを承認し、福音書及び使徒行傳の第一世紀に成りたるものなる事を信せり。又彼は第四福音書を以て長老約翰の著作也となせども、書中の傳説は眞實にして殆んど誤なきものなるを承認せり。彼は主の誕生を以て人類の觀察し得べからざる事實となせり。然れ共彼に於て否む可らざる一大事實は基督を以て世界の救主となすの信仰にして、

彼は實に誠意と熱心とを以て基督を信奉せり。彼云く「耶穌基督は神の子也、神人也、基督教の基礎、首石也」と。彼が偉大なる勢力は實に此信念に基せり。聞く懷疑的の學生も一度彼の講演に待する時は祈禱の念を起すに至ると。吾人は本書を讀むに方り議論の堂々たるものあると共に靈的趣味の津々たるものあるを見、其偶然にあらざるを感せずんば非らず。彼れ今や伯林大學の總長たり。彼を以て教師とし、先輩として仰ぐの學者甚だ少からず。假令伯林の牧師會は彼の著書を以て事實を誤れるもの也となすも、其感化の及ぶ所豈少ならんや。請ふ吾人をして彼が基督教の本質に就て果して何を云ふかを學ばしめよ。

(一一)

此問題を研究するの必要

英國の哲學者ジョン、ステュアート、ミル嘗て云へるあり、曰く「曾てソクラテスなる人の此世に生存したりしとの事は人類の須らく記憶すべき處也」と。果して然らば耶穌基督なる人物の存在したりし事は吾人の更に記憶すべき事に非ずや。吾人は幼時より基督の名を教へらるゝ也。然れ共吾人は果して能く基督を了解するや。基督は果して吾人の力とあり生命となれりや。試に耶穌基督とは誰ぞ、其世に齎し來れる使命は何ぞと問はば、異説紛々として其何れに従ふべきかを判するに苦むものあるべし。甲は云く、初代の基督教は佛教に酷似せるもの也。故に此世の過逝くことと厭世主義とを教ふるは此宗教の特質也。乙は云く、基督教は樂天的宗教にして、猶太教の更に進歩したるものに過ぎず。丙は云く、基督教は猶太教に反對して起れるものにして、寧ろ希臘思想の樹上に開ける花として見るべし。更に宗教哲學者なるものあり、云く、福音より發達せる形而上學的系統は基督教の中心也。發現也。之に反

するものは云く、福音は哲學と何の關係なし、基督教は寧ろ人の感情に訴ふるもの也。近世更に一種の批評家あり、説を著して云く、凡そ何れの世に在りても宗教、道徳及び哲學の歴史は畢竟外面的粧飾に過ぎず、其根底に在りて眞の動機となれるものは經濟の歴史也、故に基督教も亦其根源に溯れば一の社會的運動にして、基督は勞働者、貧民、無學者の救済者たりしに外ならずと、世人の基督教觀が彼此相異ると、誠に此の如きものあり、吾人は果して何れを以て眞となすべきや。

或は是れ千九百年以前に起れる出來事にして既に過去に屬せり、吾人は現在に向て吾人の理想を求めざる可らず、之を陳腐なる古文書に向て求めんとするは寧ろ無益の業也といふものあらんか、吾人が今日有する所のものは凡て過去の賜也、故に故を温ぬるは唯に歴史家の事のみならずして、亦之を以て己の富とし力とせんとするもの、任務也、福音は古し、而かも世果して之に代はるものありや、ゲーテ云く、智識と靈

との教育をして出來得るだけ進歩せしめ、人心をして出來得るだけ擴充するを得せしめよ、而かも人は福音書中に輝ける基督教の偉大、壯嚴なるより以上に進歩すると能はざるべし』と、是れゲーテが其實験と研究の結果を約言せるものにして、此の如き證言を爲すもの豈獨りゲーテのみならずや、吾人假令自ら好まずとするも、斯る證言を有するものに向て耳を傾く、豈無益也とせんや。

或は云く、基督教は今日既に衰退に赴きつゝありと、是れ事實に反するの言也、基督教は決して衰へず、否、今日は以前に優るの活力を以て進歩しつゝある也、蓋し世人が基督教の性質及び價値に對せる興味は之を三十年前に比すれば一層の熱心を加へ、此等の問題を研究するもの日に益々増加しつゝある也、而して此等の問題を論ずるもの、其基督教の爲にせると、其之を攻撃せるとに係はらず、共に活力と熱心とを示せるは吾人の見る處也、而して今日はカライルの會て云へりし如く、尙宗教

混沌の時代たるを免れず。故に基督教とは何ぞやとの問題は貴重にし
 て且緊切なるものたらずんばならず。而して此問題の解説は又宗教と
 は何ぞ、宗教の吾人に爲すべき事如何等の問題に向て光明を興ふべき
 は吾人の信ずる所也。
 以上は即ちハーナックが此問題を研究するの必要と自己が此書を著
 したるに至りたる理由とを述べたるもの也。是れ豈歐羅巴の宗教界に就
 てのみ言はんや、吾國の宗教界亦實に此重要なる問題を研究するの必
 要を有する也。

(三)

研究の方法

ハーナックが此問題を研究するに方り採用したる方法は歴史的也。即

ち彼は基督教が歴史的に發現したる種々の形状を調査吟味して、其確
 實にして永久に存在すべき内容の何たるやを示さんと試みたり。蓋し
 此問題に答ふるに種々の方法あり。辯解學者が取る所の方法は即ち其
 一也。夫の基督教の確實ある所以を辯證し、人の道徳的、智識的生活に重
 要なる關係を有する所以を示すは辯解學の任務にして素より重要な
 事業也。雖も、全然歴史的に基督教の性質を論ずるは辯解學の事に
 非ず。且辯解學が立つ所の地位は今日未だ明ならず、其採る所の方法も
 亦未だ確然たるものにあらず。世の辯解學者と稱するもの、中には稍
 もすれば基督教を以て社會の害惡を除くものとなして之が必要を唱
 ふるものありと雖も、此の如くして却て其本質を没却するものなきに
 あらず。且彼等の中には間々陳腐なる教會の獨斷説に陥り之が辯護を
 試みんとするものあり。夫れ基督教は至て單純崇高なるものにして、之
 を信ずるものに永遠の生命を興ふるは其唯一の目的也。之を以て文明

進歩の器となし、社會改良の方策となすが如きは基督教を經ふるの甚しきもの也。ゲーテ云く「人類は常に進歩するものなり、而して人は常に同一なるもの也」と。宗教の關する所のものは變化進歩の中に在りて變化する人も、素より宗教は道德經濟其他社會百般の事に關係を有すと雖も、是等のものは宗教に非ず、之を活動せしむる力及び生命、是れ即ち宗教也。吾人の學ばんとする所のものは宗教とは何ぞや、宗教の本質如何の事也。故に辯解學者が取る所の方法の如きは、ハーナツクの如き歴史的批評家の勤めて排斥する所あるは甚だ明也。

哲學的に一般宗教の概念を論究し、之に依て基督教の性質如何を推定するは宗教哲學者の任務にして、此問題に答ふる他の方法也とす。ハーナツクは或人々の如く所謂宗教的概念なるものゝ存在を疑ふものに非ず、然れ共彼は歴史的批評家にして、哲學者に非ず。故に彼は此問題に關する哲學的研究を避けて、全然歴史的の方法に依りて之が解釋を試みんとせり。

云ふ迄もあく、耶穌基督の生活と教訓とは著者研究の起脚點にして、且其最も重要な部分也。然れ共偉大なる人物の性質は獨り其言行に依りて顯はるゝのみに非ず、寧ろ其感化を受けたる人々に依りて顯はるゝもの也。故に基督教とは何ぞやとの問題に答へんとせば、唯基督の言行を研究するを以て満足すべからず、更に進んで彼と共に飲食したる弟子の上に映じたる反映を學び、且彼等に聞かざるべからず、而して又更に進んで第二世紀の基督教、さては羅馬教、希臘教及びプロテスタント教の歴史を研究せざる可らず。基督及び使徒等は彼等が教ふる宗教は後代に至りて更に大なる使命を有し、更に深き意義を有すべきを知れり、而して彼等は其發達を以て聖靈の誘導に任せたりき。吾人は唯に根幹のみならず、其枝、其葉、其外皮及び其花の開落する所以を學ぶに非ずんば、樹木を悉く知りたりといふ可らず。此の如く唯に其建設者の

みに非ず、其使徒の教ふる所、其の教會の發達せる跡を研究するに非ずんば、未だ以て基督教に關し正當なる智識を得たりといふ可らず。是れ著者が耶蘇基督の生活と其教訓とを起點として、基督教の今日に至れる發達の跡を尋ね以て此問題に答へんとしたる所以也。

夫れ基督教は基督に起り、使徒に成り、更に發達して公同教會となり、羅馬教會となり、希臘教會となり、プロテスタント教となれり。而して此等のもの甲乙相同じならず、丙丁又相共に異れり。然らば即ち基督教なるものは時と共に變化して止まざるものなりや、抑も亦其相異なる歴史的形狀の下に永遠不變の本質なる者ありて存するや、基督教の歴史は既に其初に於て後者の眞なるを示せり。見よ、初代の基督教は眞の基督教の存在せん爲に消失せり。此の如く一の變化に次ぐに他の變化を以てし、變化又變化際限ある可らず。而して此變化の生ずる所以のものは形式を脱せん爲也、期望を正しからしめん爲也、感情を新にせん爲也。

歴史家の任務は其千變萬化の中に永遠不變の本質を發見するに在り。著者が歴史的批評家として勉めたる所のもの實に爰に在り。吾人願くは是より著者に聞かん。

(四)

福音書の歴史的價值

ハーナツクは共観福音書の歴史的價值を承認し之を以て耶穌の教訓を論ずる唯一の材料となせり。而して彼は第四福音書を以て使徒約翰の著作也と信せず。著者は自己の意に従て事實を記載し自己の議論を交へ、自己の想像に従て基督の思想を敷衍せるを以て通常の意味に於て之を歴史的といふ可らずと云へり。然れ共ハーナツクは之を以て全然非歴史的となすに非ず。彼は亦書中に傳説的分子あるを認めたりと

雖、基督の歴史を論ずる憑據として之を度外に置くを以て可也となせる也。吾人はハーナツクと異り、第四福音書を以て使徒約翰の著作也と信じ、又其歴史的價值を承認するもの也。雖も亦彼と共に著者が其特異なる思想に依りて耶穌の教訓を着色せるものあるを承認せずんばならず。是れ最も保守的なる聖書批評學者と雖も承認する所にして、ウアイズ、バイシロツク、ポボン等の諸學者が其新約聖書神學を構成するに方り、第四福音書の爲に別に一系統を立てたるも之が爲也。故に吾人はハーナツクが基督の歴史を論ずるに方り獨り其觀福音書に據りたるを恠まず。

其觀福音書の信據すべき事に就て彼は實に左の如く云へり、曰く、今より六十年前ストラウスは第四福音書のみならず、其觀福音書の歴史的憑據をも殆ど破壊し去りたりと信じたりき。然れ共爾後廿年間の歴史的批評は彼が破壊し去りたりと信じたりし信用を恢復したる素より

此等の福音書は歴史の書物に非ずして其名の示す如く福音の書物也。故に事實を事實として傳ふるは此等の書の目的に非ずして、耶穌基督を信せしめんとするは其最も重なる目的也。而して著者は此目的を達せん爲に基督の事業と教訓とを記載したり。然れ共書中の事實は素より歴史的にして、其著作の目的あるものも亦基督の自ら企て玉ひしものと一致せり。此等の福音書は又黨派的の書物に非ず、且希臘的思想の感化を受けて成りたるものにも非ず。其實質は疑もなく基督教の第一世紀猶太的時代の産物也。是れ即ち今日の聖書批評學者が一般に承認する所にして、吾人が今日斯る初代の記録を有するは感謝に堪へざる所也。蓋し當時の文書が後代の文書と異なる點は主として其事實を表明する方法に在り。即ち夫の一部分は猶太人の教訓的說話より、一部分は問答的物語より其雛形を取り來れる福音書の文体なるものは僅に二三十年後の作家と雖も到底之を模擬すること能はざる也。素より福音は

希臘羅馬に傳はるに及で、希臘語を以て記録せらるゝに至りしと雖も、其希臘語なるものは畢竟透明なる面衣の如く、唯此等文書の表面を飾れるに過ぎず。故に再び之を希伯來語若くはアラメイック語に翻譯するは誠に容易の業也。去れば福音書中に記載せられたる傳説の後人の手に依りて成りたるものに非ざるは甚明なる事實也と。

ハーナツクは實に共観福音書の熱心なる辨護者也。彼は福音書中の傳説の確實なる事を證せんとして、第三福音書を引て曰く、此書は思ふにドミシアン帝の時に方り或希臘人の編纂せるもの也。其序文(路加傳一の一一四)と彼の第二の著作(使徒行傳)とに依りて之を見るに彼は最もよく希臘文に熟達せるものなるを知るべし。然るに彼は其福音書を編述するに方り、敢て傳説的の語法を改むることなく、文章の脈絡事實の配合に至るまで馬太馬可と同一の筆法を用ひ、唯僅に粗笨なる言語を改めたるに過ぎざりき。而して彼は其著書の冒頭に於て、初めより凡の

事を詳に推究し、而して其書を編纂するに方りては諸書を參考したりとの事を述べたれ共、彼が主として憑據したりしものは馬可傳にして、而して合せて馬太傳を參考したり。彼は即ち歴史家として此兩福音書が他の諸書にまさりて信據すべきものなるを見たりし也。此等の事實は即ち共観福音書の確實なるを證するもの也と。

然れ共、ハーナツクは全然非歴史的分子が福音書中に混入せざりしといふに非ず。舊約預言の應驗に關する觀念は多少傳説に影響を與へ、奇跡に關する物語は幾分か誇大せられ、基督の幼時に關する傳説は多少想像に基くものなきに非ずと云へり。然れ共、彼は斷言して云へり、假令此の如き分子が多少傳説中に混入したりしとすも、決して其中心に達せるに非ず。故に此等のものは福音書を比較することに依りて、歴史的批評の研究に依りて容易く矯正し得べき也と。

(五)

奇跡論

ハーナックは事の序を以て、奇跡に關し近時歴史批評學者が取る所の地位を論せり。蓋し奇跡は自然を以て萬事を解釋せんとする今日最も困難なる問題の一にして、之れあるが爲に福音書の歴史的價値を疑ひしもの一にして足らず。ハーナックはストラウスの如く奇跡を排斥するものに非ず。彼は云く、福音書中の奇跡は基督若くは使徒等の死後多くの年所を経て傳へられたる事に非ずして其當時直ちに傳へられ、信せられたる事實也。唯奇跡也といふの故を以て之を信せず。後人の捏造に歸するが如きは僻見に過ぎざる也。然れ共彼は又聖書に記載せるが故に之を信せざる可らずといふが如き没理漢に非ず。故に彼は之が説明を試みて云く、福音書の成りたる當時に在ては思ふに奇異なる出

來事は日々に起りたりしあるべし。而して是れ唯宗教の範圍に於てのみならず、諸種の方面に於て人々は異常の出來事に圍繞せられたりしなるべし。而して奇跡なる文字に關し吾人が今日有するが如き意義は當時彼等の全く知らざりし所なりき。奇跡と云へば今日吾人は直ちに自然法の中止若くは破壊を意義すと雖も、此の如き觀念は先づ自然法の智識あるに非ざれば成立す可らず。何れか是れ爲し得べく、何れか是れ爲し得べからざるか、何れか是れ法則、何れか是れ非法則なるかは自然法の智識を待て初めて之を判定し得べし。而して當時の人は未だ此の如き智識を有せざりき。亦何ぞ自然法の中止、自然法の破壊なるものあらんや。換言すれば彼等は嚴格なる意味に於て、吾人が今日有せるが如き意義に於て奇跡を有せざりし也。凡て奇異なる出來事は彼等に在ては悉く奇跡なりし也。又何ぞ宗教と云はん、彼等は魔術者も弄鬼馬人も神の使も均しく奇跡を行ふの力を有せりと信じたりし也。故に彼等

が奇蹟を見るや一樣ならず、或は之を以て最も貴重なるものとして尊重し、或は之を以て賤しむべきものとして輕侮したりし也。

且夫れ吾人は時間と空間との中に顯はるゝ一切の萬物は悉く運動の法則に支配せらるゝを以て、所謂奇蹟と稱するものゝあり得べからざるを信すと雖も、吾人は亦宗教を信するものは盲目なる自然法の中に閉鎖せらるゝものに非ずして、自然法なるものは更に高尚なる目的あり、人類の幸福の爲にはたらくもの也との事を確信するものなるを知らざる可らず。自然の法則は素より犯す可らず然れども之を統御するものは神也。故に宗教の方面より之を見れば凡ての勢力と法則とは畢竟神の恩寵の使者たるに過ぎず。神は其聖旨に従ひ人の幸福の爲に自由之を用ゐる玉ふ也。斯の如くして神の攝理に依て起りたる異常なる出來事はれ即ち奇蹟にして宗教を信するものゝ實際に經驗する所也。此經驗即ち宗教の起る所以にして、之を去らんか、宗教なき也。而して此

經驗は自然法の信仰と矛盾するものに非ずして宗教家は常に此信仰と此經驗を併せ有する也。

且夫れ自然の法則は犯す可らずと雖も、吾人は未だ凡ての法則を悉く熟知せりといふ可らず。物質に附隨せる勢力及び其勢力の及ぶ範圍に關する吾人の智識さへ尙不充分なるを免れず。況や精神界に屬する勢力をや、吾人は之に關して未だ知る所甚多からざる也。夫れ強き意志堅固なる信仰が肉体の生命に一種の感化を及ぼし、不思議なる現象を生ずることあるは吾人の知る所也。然らば即ち誰か實際なし得べきと稱する範圍なるものに限界を附し得べきか、誰か精神が精神に及ぼし、若くは肉体に及ぼす勢力の達し得べき限界を定め得るか。誰か此世に起れる異常の出來事は凡て迷信誤謬に基けるもの也と斷言し得るか。所謂奇蹟なるものは或は存在せざらん然れ共不思議なる、吾人々智の飢解し難き事は多く之れある也。吾人は地球の止まりたる事驢馬の言ひ

し事等に就ては之を信せざるべし、然れ共跛者の歩みし事、盲目者の見し事、聾者の聞きし事等に至ては是を信せざるを得ず。

ハーナツクは右の如く奇跡に關する全般の理論を定めて、福音書中の特殊なる奇跡に及び之を五種に區別したり。即ち(一)驚異すべき自然の出来事を誇大ならしめたるより起れるもの、(二)諺若しくは精神的經驗を外界の事物に顯はせるより超りたるもの、(三)舊約の預言を應驗せしめんとして起りたるもの、(四)基督の力に依りて救治したるもの、(五)吾人が今日其秘義を了解し難きもの是也。

奇跡の基督教に於ける地位如何、基督曾て猶太人の奇跡を求むるを見て叱斥して云く、『爾曹は休徵と奇跡を見るに非ざれば信すること能はざる乎』と且馬可は其福音書に於て基督の猶太人の不信の故に奇跡を爲すこと能はざりし事を録せり、亦以て奇跡の基督教に於ける地位を知るべき也。

去らば吾人は奇跡談の故に福音書の歴史的價値を疑ふ可らず、福音書は以上述ぶるが如く事實を記載せるもの也、若し夫れ特殊の奇跡を信するも否とは歴史的研究の結果に依らざる可らず、故に吾人は云ふ學べど、若し爾を驚かすの奇跡談あらんか、之が爲に中止する勿れ、若し爾の了解し難き事あらば之を措け、他日其意義の爾に明なるの日來らん、奇跡談の問題は福音書中比較的第三の問題也、更に緊要なる大問題は吾人は果して盲目なる必然的勢力の中に閉鎖せられつゝあるものか、りや、抑も亦宇宙には果して此自然を統御し、吾人の祈を聞き玉ふ神なるものありや否との事是也、吾人はハーナツクが與へたる奇跡の解釋が讀者を満足せしめ、讀者が進んで福音書を研究するに至らんことを希望するもの也。

(六)

耶穌の歴史と教訓

福音書記者は耶穌幼時の歴史に關しては吾人に何物をも傳へざる也。彼等の吾人に傳ふる所は唯基督の三年の公生涯のみ。馬太及路加が耶穌の降誕に關する歴史を傳へたるは事實なりと雖も、吾人は之を重要視するを要せず。何となれば書中の記事はよし信據すべきもの也とす。るも、吾人の目的より之を論ずれば是れ必ずしも要用なるものに非ざれば也。

故に吾人は耶穌三十年の歴史に關しては何事をも知ること能はず。之を傳記としては素より不完全なるを免れずと雖も、吾人は此福音書より三箇の最も重要な事實を學ぶ也。福音書の貴重なる所以實に愛に存す。三箇の事實とは即ち第一、耶穌の教訓を明白に記載せる事、第二、耶

蘇が如何に其使命を遂行したるかを示せる事、第三、耶穌が如何なる感化を其弟子等に與へたるかを明にしたる事是也。此等の事實は最も重要にして、吾人が耶穌の人物を了解し、其世に來れる目的を理會するも此等の事實を明白に會得するに依らずんばならず。

福音書記者が耶穌三十年の歴史を傳へざりし所以のものは蓋し耶穌が之を其弟子等に傳ふるを以て必要となし玉はざりしに依れり。然れ共吾人は福音書中に記載せる事實より此間の歴史に關し消極的に二三の事を類推し得べし。即ち耶穌が曾てラビの學校に於て學び玉ひし事なきは殆ど疑を容れず。彼は何れの處に於ても神學的教育を受けたるものゝ如く語り玉ひし事なし。此事實は之を使徒保羅に比することに依りて最も明白に了解せらる。保羅が教師の膝下に坐して神學を學びたりし事は彼の書翰を讀むものゝ看過し能はざる處也。耶穌は之と異り、吾人は彼の教訓に於て毫も此の如き痕跡を發見すること能はず。彼

が民衆の驚愕と非難に遭遇せしは實に彼が嘗て學ばずして教へたりしに依らずんばならず。素より彼は聖書を學び、且之を行ひたり。然れ共彼は之を當時の教師より學びたるに非ず、又彼等の如く行はざりし也。彼は又當時猶太國に在て遁世教ともいふべきエツセチス派と何の關係をも有せざりし事明也。エツセチスは最も嚴格に律法を守りたる一派にして彼等は當時の清教徒也。彼等は一定の場所に住居し、唯に不潔なる人々と交際せざりしのみならず、少しにても律法を犯すものと交るを許さず、別に一社會を爲せり。耶穌は之に反し、罪人と交り、又彼等と共に飲食せり。彼が其弟子に與へたる教訓中にはエツセチス派の教へたるものと一致せる處少からざりしと雖も、是れ偶然に近似せるものにして其動機に至ては素より相同じからざる也。

又耶穌が三十年間の歴史に於て一の危機を有し玉はざりし事は甚だ明也。吾人は彼の教訓及び説話中に於て何れの處にも彼が嘗て苦悶、争闘を経過し玉ひし痕跡を發見すること能はず。彼の説話は宛も源泉の涇々として地より湧出づるが如く、最も自然に流れ出づる也。半生を苦悶、争闘の中に經過せるもの、果して誰れかよく此の如く語り得るものぞ。彼は萬衆に呼號して云く、福音を信じて悔改めよと。而して曾て彼れ自らの悔改に就て語らざりし也。是れ豈苦悶、争闘、悔改の歴史を有するもの、爲し得る所ならんや。

尙一事の云ふべきあり、耶穌の生活と教訓を見るに希臘思想の感化を有せざる事は也。是れ實に驚くべき事也。何と云へばガリラヤには多くの希臘人の居住せるあり、而して希臘語は當時其多くの都市に於て盛んに使用せられたれば也。當時ガリラヤには希臘の教師、哲學者等來りて居住したりしと云へば、耶穌が全く希臘語と其思想を了解せざりしとは信する能はざる也。然るに耶穌が秋毫も彼等の感化を蒙らざりしは、寧ろ驚くべき事實也とす。素より耶穌の教訓と希臘思想との間には一

致融合せる點なきに非ず、夫の神と靈魂と認むるが如き、各人各個の責任を主張せるが如き、政教の分離を説くが如きは即ち兩者の近似せる點なりとす。若し此の如き思想は希臘の中にのみ發達したりしといへば、耶穌も亦希臘思想の感化を受けたりしと云はざる可らず。然れ共斯る思想は唯に希臘に於て發達したりしのみならず、亦他國民の中にも發達したる也。誰れか「我れ爾の外天に於て誰をか有たん、我が地に於て望む所のもの爾の外あるなし」と云へるイスラエル詩人がソクラテス若くはプラトリーの感化を受けたりと信するものぞ。

耶穌は宗教に生活せり、宗教は實に彼の呼吸なりき。彼の全生涯彼の凡ての思想彼の凡ての感情は悉く彼と神との關係に傾注せり。然れ共彼は一面を見て他面を忘るゝが如き熱狂家にては非らざりき。彼は世と世の有する凡ての物に盲目あるものには非ざりき。彼は明白にして新なる眼を以て彼を圍繞せる世界を見たり。彼は人もし其生命を失は

い全世界を得るも何の益あらんやとの事を宣傳せり。然れども彼は凡て生けるものに對するに親切と同情とを以てせり。彼は人の如く語り而して彼の説話は人情を以て充てり。彼は時として憤激を昂せる語調を以て非難攻撃の言語を語り、又時としては諷刺の言さへ用ゐたりしかども、彼は尙常に平靜沈着慎重の態度を有したりき。彼は嘗て法外なる言語を用ゐず、鼓舞的預言の語調も亦彼に在ては甚だ稀ありとす。彼は最大の使命を荷ひ、其耳目を用て己を圍繞せる万般の生活を注視傾聴せり。悲み哭く事、笑ひ踊る事、貧富、飢渴、健康、疾病、集むる事、散らす事、婚姻、葬儀、生けるもの、美しき家、死せるもの、墓、壽くもの、種るもの、葡萄園の主人、情れる僕羊を求むる牧者、眞珠を求むる商人、失ひたる錢を搜索する婦人、酷薄なる裁判人に強訴せる癡婦、滅ぶる地の食物、師弟の關係、凡そ此等の光景は彼が取て以て其説話を説明し、其教訓を明白ならしめたるもの也。彼は又野の百合花、天空の鳥を借りて神と人類との關

係を教へたり云く、『ソロモンの榮華の極の時だにも其裝此花の一に及ざりき』と又云く、『爾曹の天の父は之を養ひ玉へり』と譬喩の彼の最もよく用ゐたりし所のものなりき而して彼の人を教ふるや勇敢なる懺悔者の如くならず又狂喜せる預言者の如くならず自ら平和を有し而して生命と力を他に與へ得る人の如く語りたりき彼の語る所は高調にして其命する所必ず之を通るゝを得ざらしむ而かも彼の感情は自然にして其言語亦自然也彼は即ち母が其子に語るが如き言語の中に其最も強大なる感情を包みたりし也。

(七)

バプテスマの約翰

ハリーナツクは耶穌の教訓と其使命とを論ずるに先ちてバプテスマの

約翰の使命を論じたり吾人も亦論歩の順序として先づ之を紹介せざる可らず。

耶穌の世に出でたりし時に方り既にバプテスマの約翰はヨルダン河畔に於て數ヶ月間宗教的大運動を試みたりき彼の運動は數十年間猶太國民を活動せしめたるメツシヤ的運動なるものと異りき彼は神の國は近づけりと呼べり而して其意主の審判の日來れりといふに外ならずりしは明也と雖も彼の所謂審判の日なるものは神が異邦人を罰しイスラエル國民を救ふの意に非ずして其審判なるものは寧ろイスラエル人の上に来るべきものなりし也故に彼は云く『誰が爾曹に來らんとする怒を避くべきことを告しや爾曹我濟が先祖にアブラハムありといふことを思ふ勿れ我爾曹に告ん神はよく此石をもアブラハムの子とならしめ玉ふ也今や斧を樹の根に置く故に凡て善果を結ばざる樹は斫れて火に投入らるべし』と審判の日に於て刑罰を免るゝは

アブラハムの子孫也との事に非ずして、正義を行ひたりとの事也。而して約翰自ら悔改を以て初め、身に駱駝の毛衣を纏ひ、口に蝗蟲と野蜜を食して彼等の前に立ちたりき。然れ共彼の事業は隠者を集むることにては非ざりき。彼は各種の職業を有せる國民に向て悔改を命じたりき。而して彼の教へたる真理なるものは甚だ簡明なるものなりき。即ち彼は税吏に向ては云ふ、「定例の税銀の外に多く取ること勿れ。」兵卒に向ては云ふ、「人を強暴し或は誣訴ふることを爲す勿れ。得る所の給料を以て足れりどすべし。」富者に向ては云ふ、「二の衣服をもてる者はもたぬ者に分與へよ。食物をもてるものも亦然すべし。」凡ての人に向ては云ふ、「貧しき者を忘るゝ勿れ。」是れ即ち彼が所謂悔改に適へる果なるものにして、彼の傳ふる所の悔改のバプタスマなるものは單にバプタスマを受くるの謂に非ずして、義しき神の前に在りて義しき生活を爲すの謂也。彼は曲禮、犠牲律法の功作に關しては何事をも語らざりき。而して彼の

最も重じたりしものは正しき心と善良なる行爲にして、審判の日に於て神は此標準に従て人を審判し玉ふべしとの事是なりき。以上の事實に依て之を見れば、約翰が其國民に向て傳へたりしものは彼等は神の嚴なる道德律に依て審判せらるべしとの事にして、彼が其國民に向て求めたりし正義若しくは善良なるものは畢竟通常の徳義に過ぎざりしを知るべし。於是吾人は數個の疑問に接するを見る。若し果して彼の傳へたる正義若しくは善良なるもの單に通常の徳義に止まりしとせば、彼が殊更に審判の日來れりと叫び、今や斧を樹の根に置かると叫びし所以如何、是れ第一疑問也。抑も亦彼が曠野に於てバプタスマを施し神の國近きに在りと宣傳したるは是れ猶太國民當時の政治、社會上の状態を反映したるものに非ざるか如何、是れ第二疑問にして、第三の疑問は彼の宣傳したる言の中曾て猶太教に於て傳へられざりしものは何ぞの事是也。此等三個の疑問は互に密接の關係を有

す、吾人は今簡單に之を左に説明すべし。
歴史の證する所に依れば凡そ何人にてても其實験より熱心を以て人を
神に導き善を爲さしめんとする時は其宣傳する事柄の神の救拯たる
と審判たるに拘はらず終は近けりとの事を叫ぶもの也、其故如何、蓋
し宗教とは神の中に神と共に生くとの事のみならずして、又其生命の
意義と責任とを示すもの也、故に深く宗教を信するものは又深く宗教
に依らずして生命の意義を討ねんとするの無益なるを悟り、世の宗教
あきものが目的なくして岐路に彷徨するを悲む也、夫の預言者なるも
のは即ち人類の冷淡にして過誤罪惡に沈むを見て其心恐懼と苦痛に
満てるものにして、彼は宛も旅客が其友の千仞の絶壁は陥らんとする
を見るが如く、自己の生命を賭するも尙之を救はんとする也、時は迫れ
り、而かも尙彼に危を告ぐべく、彼を九死の中より救ふべし、若し一刻を
緩ふせんか、事恐くは去るべし、時は迫れり、今は實に最後の瞬間也、是れ

凡ての時凡ての國民に向て悔改と改心とを促したる預言者の叫也、預
言者は歴史の過程を洞觀し、人類の終末を透視す、而して不敬虔、無智、輕
薄、懶惰なる人類の速に亡ぶべくして亡びざるは彼の最も驚愕に堪む
ざる處也、悔改むべき瞬間は尙殘れり、是れ實に神の寛容なる恩寵に依
れり、然れども終は決して遠からず、其速に來るべきは甚だ明也、故に彼
は呼で云く、『終は近けり、悔改めよ』と、約翰が其説く所の徳義嶄新なるに
非ざりしも尙天國の近きに在るを叫びたるもの實に之れが爲也。
△當時猶太國民の社會上及び政治上の状態は約翰の宗教的運動の依て
起りたる原因には非ざりしか、是れ第二の疑問也、當時猶太國民は既に
二百年間國難の中に在りき、彼等はアンチオカス、エピファチスの時以
來未だ嘗て一日の寧日をも見ざりし也、マツカピスの王國は建設せら
れたりき、而かも内亂に次ぐに外難を以てし、幾ならずして可憐なる此
の王國は倒れたりき、羅馬帝國は遂に此國を掠奪し、鎖鎖を其上に置け

り暴虐なるヘロデは國民の凡ての快樂を奪ひ殆ど其手足を切斷したり此國が再び舊時の有様に復せんことは何人も望む能はざりし所に於て預言者の預言も空しく國家の終極終に來りしが如き觀ありき此の如き時に方り國民が地上の事に失望し政治上の權力も國家の富も勤勉も争闘も悉く無益也として更に新なる王國を望むに至るは自然の狀勢也且夫れ猶太人の神に關する思想は數百年間漸次變易し來り彼等は神が彼等を此艱難の中に陥らしめ玉ひしは彼等を救はん爲也と亦し而して奇跡を以て今彼等を困難の中より救ひ玉はん事を望みたりき僞教主の起りたるは蓋し國民の此希望に副はんとしたりしが爲にして、パリサイ人の政治的運動も亦實に此氣運に促されて起りたりし也然れ共吾人は未だ之に依て約翰の宗教的運動を説明する能はず夫れ困難は人をして祈らしむ然れ共道德的勢力を興ふるものに非ず然るに約翰運動の最大要素は道德的勢力也彼は道德的勢力に

訴へ凡てのものは道德と各自の責任に依らざる可らずとの事を宣言せり。

今より凡そ百年前フイヒテは獨逸國敗北の後伯林に於て有名なる演説を爲したり彼の此演説に於て示したるものは先づ第一に國民の罪惡及び其結果ありき彼は次に國民に向て武装すべしとの勸告を興へたりしや否國民は最早武装するに堪はざりき故に彼は彼等に向て悔改を命じたりき彼は其強き人格と彼と心を同ふする朋友の助に依りて大なる感動を國民に興へ彼等をして再び勢力の源泉を作ることを得せしめたりき抑も彼をして愛に至らしめしものは一は時世の必要に依ると雖も彼の雄辯は國歩艱難の結果也と云はれ思も亦極れり約翰の使命も亦然らざらんや彼及び耶穌が政治上の希望を有せざりしものに向て訴へたりしが如き國民を零落の淵に沈めたりし嚮導者に無頓着なりしが如き地上のものには全く注意せざりしが如き當時

の狀況之をして然らしめたりし也といふを得べしとするも、彼等が宣傳したりし救済策なるものは決して境遇の産物に非ず。然らば即ち彼等をして斯る勢力を得せしめたる源は何ぞ、此に於て吾人は第三問に入らざるを得ず。第三問は約翰の運動に於ける新原素は何んぞやとの事是也。一神教は早くより猶太人民の信奉したりし所也。彼等の詩人は曾て『主よ我爾と共に在るとき天と地とに求めず』と歌へり。彼等の豫言者は又『オ、人よ彼れは爾に善なるものを示せり。主は爾が正しさを爲し、仁恵を愛し、謙りて爾の神と共に歩むの外爾に何を求めんや』と云へり。誰れか又此等の言に勝りて其宗教的熱心と敬虔とを顯はし得んや。於是猶太の學者は問て云く『爾の基督に求むる所は何ぞ、彼は曾て新しきものを携へ來らざりし也』と。余はウエルハウセンと共に答へて云はん、基督及びバプテスマの約翰が宣傳したりしものは亦豫言者の中にも、當時猶太人の傳へたりし傳説の中にも發見し得べきは誠也。パリサイ

イ人は實に此等のものを有したりき。然れ共不幸にして彼等は此外にも尙多くのものを有したりしのみならず、彼等にまさりて之を愛し、之に依りて彼等を曲解し、隠蔽し、無能にし、無力にしたり。彼等或は云はん、『然らば約翰と基督の新に傳へたりしものは何ぞ』と。素より彼等の傳へたりし所のものは一神教の外に出づること能はざりき。然れ共試にイスラエル人民の宗教歴史を取て之を見よ、唯にイスラエルのみならず、世界の宗教歴史中何れの處にか又吾人が福音書中に於て見るが如き神に關し、善に關し、高潔にして且有力なる教訓を發見し得るものぞ。神の源泉は既に久しく其口を開きたりき。然れ共其口は泥沙を以て塞がれ、其水は濁りたりき。然るに今や源泉は新に其口を開き、清き水は沸々として迸出し、祭司、學者等が築きたる神學の泥沙は毀たれ、宗教の眞要素は明白となれり。且夫れパリサイの教師等が教へたりし所は眞理なりき。彼等の語りし言語は美はしかりき。然れ共其結果は如何、猶太國

民殊に彼等の弟子は此の如く語りし彼等を罪したりき、彼等の云ふ所に權威なかりければ也。凡そ言語をして有力ならしむるものは其裏面に在る人格也。耶穌の弟子等は彼の教に驚はり、「學者の如くならず、權威をもてるもの、如く教へ玉へば也。」彼の言語は生命の言語なりき。生じて果を結ぶ種子なりき。約翰も亦實に此の如き使命を有して世に來り、敢て時の君主、政治家、教法師に反抗して起り、彼等に向て悔改を命じたりき。其教訓の新なるに非ず、勇氣と活力とを以て之を傳へたる也。

(一八)

耶穌の使命

然れ共約翰の使命は悔改の外に出でざりき。耶穌基督は彼に次ぎて起れり。彼は先づ約翰及び約翰の使命を承認し、最も同情ある稱讚の言を

以て、「婦人の生みたるもの、中未だバプタスマ約翰の如きものあらざ」と云へり。且彼は屢々約翰を以て彼の先驅者也と宣言したりしのみならず、約翰よりバプタスマを受け、其身を約翰の創始したる運動の中に投じたりき。

然れ共彼の事業は勿論是のみにて止まらざりき。彼が初め世に顯はるや、約翰と同じく「天國は近けり、悔改めよ」と宣べたりしは誠也。然れ共彼の使命は福音を傳ふるに在りき。故に路加は基督の公生涯を記するに方り先づ預言者イザヤの言を引けり、云く「主の靈我に在す、故に貧者に福音を宣傳へんことを我に膏を注ぎて任じ、心の傷める者を醫し、又囚人に釋さん事と替者に見させん事を示し、又壓制らるる者を放ち、主の禱年を宣播んが爲に我を遣せり」と。又馬太は耶穌の言を記せり、云く、「凡て勞たる者又重を負へる者は我に來れ、我爾曹を休ません、我は心柔和にして謙遜者なれば我軛を負ひて我にならへ、爾曹心に平安を得べ

し、蓋我軼は易く我荷は輕ければ也」と此等の言は即ち耶穌の使命を記せるものにして、彼が教へたりし所のもの、彼が爲したりし所のものは悉く此中に含蓄せらるゝ也。彼の教訓が如何に約翰より進歩したるものありしかは此等の言語に依て明也。約翰も當時の學者、祭司等と争ひたりき。然れ共「イスラエルの多くの人の類て且興らん事と誹駁を受けん其號に立てられたる」は耶穌基督なりき。彼は實に當時の學者、教法師と戦はん爲に來りたりき。彼等は謂えらく、神は神殿に在りて儀禮を受くる君主の如くなり、然れ共彼は云ふ、神は何れの處にも在らず也。彼等は無數の訓誡を有し、之に依て神を知れりと思へり。然れ共彼は唯一の訓誡を持し、之に依て神を知れり。彼等は宗教を以て地上の職業となしたりき。然れ共彼は生ける神と靈魂の尊貴とを教へたりき。然れ共耶穌の教訓は之を大別して三となすことを得べし、即ち

第一、神の國と其來ると、

第二、父なる神及び人類無限の價値、

第三、最高の義及び愛の誠、

ハイナツクは以下此區別に基き、序を追ふて耶穌教訓の本質を論究せんとする也。

(九)

神の國と其來る事

ハイナツクが基督教訓の根本的思想を大別して三個となしたりとは前既に述べたるが如し。今や吾人は其第一の思想即ち神の國の觀念に關する著者の説を讀者に紹介するの機に達せり。著者の説を一言に約すれば、基督の所謂神の國とは人心に活動する神の力にして、即ち此世に於て實現せらるべき事實也。夫の未來の賞罰に關する説話の如

きは基督が當時の猶太教より取り來れるものにして、之を解説せんとせば基督特異の思想に照らさる可らずといふに在り、請ふ著者をして自ら語らしめよ。

著者云く、耶蘇の宣傳し玉へる神の國なるものは先づ未來に於て神が自ら支配し玉ふべき王國の謂にして、彼は舊約聖書より取り來れる思想に従ひ種々の形狀に於て之を説明せり、而して彼は又神の國を以て人心に來るものとなし、彼自らの使命を以て初まるものとあせり、此の如く耶蘇の使命は兩極を有す、即ち一端に於ては神の國の來るは全然未來に在りとし、而して神の國とは外界に於ける神の支配を云ふもの、如し他端に於ては神の國は人心の内部に起るものにして、既に顯はれ來りたりとなすもの、如し故に神の國及び其如何にして來るやに關する彼の思想は一見明白ならざるものあるを見るべし、蓋し彼は此思想を當時猶太國民の間に傳へられたる宗教的傳説より取り來り、而

して之に彼の新しい思想を附加したりし也、但し彼は當時猶太國民が抱きたりし政治的、世俗的希望をば全然排斥して顧みざりき。

耶穌は最も熱心なる當時の國民と同じく、神の國と此世の國との間に在る反對を認め、此世の國は即ち惡魔の支配せる所のもの也との事を承認せり、是れ彼が明に見深く感じたる真理にして、空想には非ず、而して彼は此世の國なるものは遂に滅亡すべきものにして、其滅亡は戦争に依て來るべきもの也との事を信じたりき、彼は豫言者が嘗て之を畫きたりし如く、最も分明に其激しき戦争と勝利とを見たり、而して彼は此戦争の終に於て自ら父なる神の右に座し、其十二使徒は各々其位に座してイスタエルの十二の種族を審判しつゝあるを見たり、是れ當時國民の抱きたりし思想にして、彼は取て之を己の思想となしたりし也、抑も此思想は神の國に關する彼の思想の根本的觀念なるべきや、或人は然りとせよ、余は之に同意すると能はず、蓋し思ふに世に新紀元

を開ける偉人を議するに、彼が當時の人々と共に抱ける思想に依りて之を判定し、而して彼に特異なる思想あるを顧みざるは大なる誤なり。成るべく、獨自一個の説を棄て、世人共通の思想を得んとするは思ふに眞理を愛するより出て來れる傾向なるべしと雖も此の如きは却て事實を誤るもの也。耶穌が當時の人と共に神の國と惡魔の國との存在を信じ、此二個の王國が激しく相戦へる後遂に惡魔の國は全敗に歸すべきを信じたりしは疑なし、而して彼は自ら此思想を創始せず、却て此思想の中に生長し、又之を保存したりし也。彼が創始せる獨自の思想は「神の國は顯はれて來るものに非ず、見よ爾曹の中に在り」どの事是也。耶穌の吾人に傳へたる神の國は此の如く一方に在ては未來に存在すべき神の支配にして、他方に在ては人心にはたらく平靜にして且力ある勢力也。吾人は今日殆んど此相異なる思想を調和するに能はず、然れ共何が故に此相違せる思想が少しも反對を示すとなくして兩立するを得たりしかを知らんと欲せば、勢ひ過去の歴史に溯りて之を研究せざる可らず。抑も耶穌の神の國に關する思想は何れか傳説的にして何れか創始的なる、何れか眞實にして何れか皮相なる、之を區別するは歴史家の任務にして素より困難なるを免れず。吾人は抑も如何なる點に迄溯りて之を研究すべきや、蓋し思ふに耶穌の吾人に語れる譬喩は最もよく此間の消息を傳ふるもの也。故に神の國と其來ることに關し耶穌が何を云はんとしたりしかを知らんと欲せば、須らく彼の譬喩を學ばざる可らず。神の國は個人に來り、人の靈魂に入りて人之を緊握すること、に依りて來る也。神の國は神の統治也といふは眞實也、然れ共是れ個人の心中に於ける聖なる神の統治也、人の心中に力を有する神自身也。此點より之を考ふれば神の國を以て單に外界に在りとし、未來に顯はるゝもの也となすは誤れり。試に耶穌の語れる譬喩を取て之を見よ、或は播種の喩、或は眞珠の喩、或は畑に藏れたる財寶の喩、其何れに在る

も神の國は神の言葉也、神自身也、天使と惡魔の問題にあらず、位と權力との問題に非ず、神と靈魂、靈魂と其神との問題也。
耶穌が神の國の來るを以て惡魔の國の滅亡也となせるは注目すべき事實也、惡魔は既に久しく世を統治したりき、彼等は猶太國民に憑き己れの思ふ儘を爲したりき、耶穌は惡魔の工を毀たん爲に來れりとのことを宣言したりしのみならず、又自ら惡魔を追ひ出したりき、蓋し福音書中惡魔に關する說話程奇異なるものあかるべし、今日多くの人は斯る記事あるが爲め福音書の眞實を疑ふ也、然れ共吾人は之と全く同一なる記事の希臘羅馬及び猶太の文書中にも亦多く存在すとの事を知らざるべからず、思ふに「憑かる」と云へる觀念は當時一般に行はれたるものにして、當時の科學なるものも之に依て凡て不健全なる現象を説明せんとしたりしが如し、既に此の如き現象を以て惡魔の來りて人に憑きたる也となせる結果、精神的病者が實に外物の入りたるが如く

感ずるに至りしは毫も怪しむに足らず、若し今日の科學が精神病なるものは大抵外物に憑かるゝより生ずるもの也との事を公言し、而して新聞紙も亦此説を世間に流布せば、恐くは今日と雖も之と同一なる事件發生すべし、去れば惡魔に憑かれたりといへるは當時一般に行はれたる信仰にして、福音書記者は唯當時の信仰を繼承したるに過ぎず、之を以て福音書及び其記者に特有せる説也となすは事實に非ず、今日は福音書中に示せるが如き精神病者甚だ少しと雖も、亦全く其跡を斷ちたるに非ず、而して此の如き病者を醫するの道唯強大なる人物の勢力を用ゆるに在り、即ち惡魔を威嚇服從せしめて病者を醫す也、パレスターインに在ては此惡魔に憑かるゝといふ事殊に多かりしは疑なし、故に耶穌は其強大なる力に依りて彼を信せるものより惡魔を逐出し、以て其病を醫したりし也。
次に吾人の注目すべきはパプテスマ・約翰が獄中に在りて耶穌の使命

に關し疑惑を抱けるるとき、其二人の弟子を耶穌に遣はして、來るべきものは爾なりやと問しめたりし事是也。耶穌は其時答へて云く、「爾曹が聞く所見る所の事をヨハチに往て告げよ、瞽者は見、跛者は歩み、癩病者は潔まり、聾者は聞き、死たる者は復活され、貧者は福音を聞かせらる、凡そ我爲に贖かざるものは福也」と是れ即ち神の國の來るを示せるものにして、神の國は既に此救拯的活動の中に存在する也。約翰たるもの須らく之に依りて神の國の來るを知らざる可らず、惡魔に憑かれたるものを醫すは此救拯的活動の一部分也、然れ共耶穌が使命として自ら任せしは其救拯的活動にして、彼れ即ち貧しき者、病める者、苦める者を救ひたりし也、彼は凡ての惡凡ての禍を以て共に恐るべきものとなし、之を以て惡魔の權力の然らしむるものとあせり、然れ共彼は又自ら救主の權力を有するを感じ、神の國の進歩は唯弱きに勝ち、病を醫すに依りてのみ爲し得べき事を知れり。

然れ共彼は更に進んで神の國は彼が人の罪を赦すに依りて來るべしとの事を宣言せり、彼は病める者、貧しきものを招けると共に、亦罪人を招けり、彼云く、人の子の來るは罪ある人を招きて悔改めさせんが爲也」と是れ即ち耶穌の使命に於て最も重要な部分にして、神の國の觀念は此に至て人心の内部に活動する勢力とあれり、彼に依て贖はるものは個人にして國民に非ず、彼の造る所は新人也、此の如くして神の國は直ちに彼等の力たり、目的たり、彼等は畑に藏くれたる寶を求めて之を見出し、其所有を悉く賣りて價貴き眞珠を買ふ也、彼等は之に依て改心し贖はれ、神の子となり、雄卒となる也。

耶穌は又之と共に勵みたる人々は神の國を取れりとの事、及び神の國は種子の實を結ぶが如く靜に生長するものなりとの事を語れり、神の國は此の如く靈的勢力にして、人心に入る所の力也、故に他方に於ては假令神の國は天に在り、審判の日と共に來るべしと云ふと雖も、彼は尙

「神の國は此に視よ彼に視よと人の言ふべきものに非ず、爾曹の裏に在り」と云ひたりし也。

耶穌の弟子等は神の國を以て單に未來に在るものとなしたりしが如き觀ありしと雖も、神の國に關する根本的思想はよく保存せられたりき蓋し神の國に三個の意義あり、第一は超自然なりとの事、即ち神の國は天よりの賜にして此世の産物に非ずとの事、第二は神の國は全く宗教的恩寵にして生ける神との内的關係也との事、第三は之に依て罪の赦を得、世の災害除かるべければ人生に於て最も重要な經驗也との事是れ也、尙此等の意義を完全に了解せんとせば更に進んで第二の思想即ち父なる神及び人類無限の價値に就て研究せざる可らず、以上著者が神の國に關する説は吾人別に批評するの要を見ざるを以て直ちに進んで第二の點に移らんとす。

(十)

父なる神及び人類無限の價値

若し便宜の爲め著者の言を一言にして約せんか、人類無限の價値は吾人が神を父として承認するに依りて生ずる也、單に自然の立脚地より之を論せんか、吾人は決して耶穌の要求したりしが如き價値を吾人の靈魂に向て要求すること能はざる也、吾人は唯天地の主を仰ぎ見て、之を「我父」と稱へ得るが故に天地の上に超出するを得る也、プラトールも靈魂の價値を認めたりき、然れ共彼の所謂靈魂は智識を有する靈魂にして、彼は唯教育あるもの、みに語れり、萬民の靈魂悉く皆神の前に價値を有すとの事を承認したるは實に耶穌基督を以て嚆矢となすといふに在り、吾人は更に著者として自ら語らしむべし、吾人今日の思想に照じて基督の使命を最も明白に了解せんとせば父

なる神と人類無限の價值に關する彼が思想を合せ考ふるに若くはなし。蓋し耶穌使命の全体は此二個の題目に約し得べし、而して此事實は福音は律法的若しくは特殊的元素を含有するものに非ずして、宗教夫れ自らなりとの事を吾人に示すもの也。故に福音は此世と來世、道理と熱狂、世間と出世間及び猶太教と希臘教との區別の上に超然たるものにして、世俗的の元素其中に存することなし。然れ共耶穌の所謂吾人が神の子なりとは如何なることなりや、吾人は今之を明白に了解せん爲に彼が語れる四箇の言に就て簡短に之を考ふべし。四箇の言とは即ち

(一)主の祈、(二)惡鬼の爾曹に服し、事は喜とする勿れ、爾曹が名の天に録されしを喜とすべし』といへる言、(三)二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に隕るとあらじ、爾曹の頭の髮皆數へらる』といへる言、(四)若し人全世界を得るとも其生命を失はば、何の益あらんや、又人何を以て其生命に易へんや』と云へる言是也。

吾人をして先づ主の祈に就て考へしめよ。此祈は耶穌が或峻嚴なる時に於て其弟子に教へ玉へるもの也。一日弟子耶穌に來りて云く、『約翰其弟子に教へたるが如く、我儕にも祈ることを教へ玉へ』と、耶穌此に於て彼等に此祈を教へ玉へり、凡そ宗教の性質は其祈に依て斷定せらるもの也。而して此祈は神の前に在りて全く心中の不安に勝てるものに依りて語られたるもの也。劈頭神を呼びて『我儕の父』といふ、是れ自ら神の前に在りて平安を感じ其祈必らず聞かるべしと信する人の確信を顯はすもの也。彼は天若しくは地に於て此幸福若くは彼の幸福を得んことを祈らず、唯既に得たる方を保持し、現に有する神との調和を固めんと祈れるのみ。其心平安に満ち、神と最も親密なる關係を有するものに非ざれば何人も此の如き祈を捧ぐること能はざる也。凡そ通常の祈禱なるものは或特殊の事柄、若しくは外界の幸福を祈るものなるが故

に下賤なるを免れずと雖も、此祈は吾人を導きて吾人の靈魂として唯神と共ならしむる高點に達せしむるもの也。素より此祈の中にも全く地的要素なきに非ず、其後半は即ち地上の事に關して祈れるもの也。然れ共其之を祈るや唯之を永遠の光明に於てせり。假令靈的の事柄にもせよ、或る特種の幸福を祈るは無益也。主は云はずや、此等のものは凡て汝に加へらるべし』と神の名、神の聖旨及び神の國は即ち永遠に存するものにして、地上のものに優りて吾人の求むべきもの也。地上の事に關して吾人が祈るに足るべきは唯四箇、即ち吾人が日々に要する糧、吾人が日々犯す罪、吾人が日々遭遇する誘惑と惡是也。福音の中何ものも主の祈よりも優りて確實に福音の何物たるを吾人に示すものなし。吾人は又此祈に依りて福音を以て厭世的となし、若くは熱狂的となし、若くは社會的となすものに反對せざるべからず。此祈は實に福音は神の父なることを人生の凡に適用し、神の聖旨と神の國との内的調和を得せしめ、永遠の幸福を保持し、罪惡より救はるべしとの確證を與ふるもの也。どの事を示すもの也。

耶穌が七十人の弟子に向て「惡鬼の爾曹に服し、事を喜とする勿れ、爾曹が名の天に録されしを喜とすべし」と云へるは、此宗教に於て最も大切なる要素は神の前に在りて安全也との意識を有すること也。どの思想を示せるもの也。父なる神の愛護の下に在りて今も後も永遠に安全也との確信は、基督教の最も重要なる部分にして、其外何物も之に比すべきものならず。而して宗教的實驗の眞理なること、否其存在せることは或る卓絶せる感情若くは人の耳目を聳動する大事業に依りて計らるべきものに非ずして、唯「我父よ」と云ひ得る靈魂の中に瀰漫せる喜悅と平和とに由りてのみ計り得べき也。

耶穌は此天父の攝理に關する思想を如何に表示したりしや、吾人は此に於て耶穌の第三の言に達せり。彼云く、「二羽の雀は一錢にて售るに非

すや、然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に隕ることあらじ、爾曹の頭の髮皆數へらる」と。神攝理し玉ふとの確信は吾人が畏懼の情の達する所に達せざる可らず。耶穌は此言に依りて吾人は何物をも恐る可らず、死さへも恐るべからずとの事を教へ玉へり。吾人は之に依りて生ける神の攝理の手は人生百般の事に涉りて及ばざる限なきのみならず、死後にも尙及ぶべきもの也とのことを學ばざる可らず。耶穌は又云へり「若し人全世界を得るとも其生命を失はば何の益あらんや」と。彼は此に於て人類に無限の價值を附與したり。天地の主に向て「我父よ」と云ひ得る人は之に依りて天地の上に超出し自ら地上の万物に優れる價值を有する也。試に此思想を以て希臘の思想と比較し以て兩者の相違を見るべし。プラトンは早く既に靈魂の尊貴を承認し、之を現象世界と區別して、其永遠に出づるものなることを主張したりき。然れ共彼の所謂心とは智識を有するもの、心にして、彼は之を盲目無智

なる心と比較したりき、而して彼の使命は唯智慧あるものに語るに在りき。耶穌基督は之に異り、彼は凡ての貧しきもの、凡て人の容貌を備ふるものを招き、之に語りて云く「汝は神の子也、汝は唯に雀に優るのみに非ず、又全世界をも優れり」と。彼は實に人類の價值を初めて吾人に示したるものにして、過去の歴史に於て未だ彼の如く語りしものあらざる也。

彼が凡てのものに對する估價は世人の考と異なりき。故に彼は其所有の豊饒なるを誇るものに向て云ふ「愚なるものよ」と。彼は又凡ての人に告げて云く「凡て其生命を失ふものは之を得べし」と。彼は更に云ふ「其生命を惜むものは之を失ひ、其生命を惜まざるものは之を存ちて永生に至るべし」と。是れ古人が曾て朦朧として見たりし眞理にして、耶穌に依りて初めて確實明白となりしもの也。耶穌が事物の估價既に此の如し、其人類に對して無限の價值を與ふ、自然の事なりといふべし。

吾人若し以上の思想を綜合せば爰に福音の全壁を見ることを得べし。而して又宗教の逆説は初めて爰に完全の説明を得たるを知るべし。凡そ宗教上の現象は五官の經驗に依りて之を見れば一として逆説ならざるはなし。即ち宗教なるものは何れも經驗世界に於て認識する能はざるものを以て最も重要なものとなす也。然れ共基督教を除きては何れの宗教も多少地的の事物に拘束せられ、世俗的要素を含蓄するを免れず。然るに耶穌は云く、「汝の頭の髮皆數へらる、汝は無限の價值を有す、汝は何物も見ざる能はざる權威の手中に自己を任せ得る也」と是れ無意義に非ずんば、宗教の發達し得べき最高點に達したる也。吾人の求むべきものは五官に伴ふ現象に非ずして、人生の眞意義也。宗教は現象世界を超越す、宗教は新なる光明に依りて宇宙を看察せしむ、之に依りて永遠は顯はれ、時は目的に到るの手段となり、人は永遠の光明に照らして見るべきものとある。是れ即ち耶穌が吾人に示さんとせる所のもの也。

彼は攝理の思想を人類及び世界に應用し、人類は永遠の神より出でたりとの事を明にし、而して吾人は皆神の子也との事を宣言して、凡ての宗教が嘗て摸索したりしものを最も明白確實に教へたり。抑も耶穌とは何人ぞ、其使命如何、此等の問題に關しては多少の議論あるべし、然れ共彼來りて人類の價值高まり而して吾人相互に益々接近しつゝあるは何人も之を疑ふを得ず、而して此の如く人類の價值の認められたるものは實に彼が神を以て萬民の父也と教へたりしに依らずんばあらす。

(十一)

最高の義及び愛の誠

是れハーナックが大別したる耶穌教訓第三の題目にして、福音の倫理

的方面を論せるもの也。耶穌は德義の源を心情に在りとあし、更に其根源を尋ねて愛に溯り之を以て人間德義の根本的動機となしたり。耶穌は此の如くして德義と儀式的宗教を區別したりしかども、德義と宗教とを全然區別したるには非ず。即ち彼が此兩者を結合せるものは謙遜也。謙遜は神の恩寵と赦罪を渴望する人心の要求にして、換言すれば神を愛するの愛也。而して萬善は悉く之れより流れ出づる也。是れ即ち「一ナツクが福音の倫理的觀察を約言せるものにして著者の議論は即ち左の如し。

福音を以て倫理的教訓として表白するは必ずしも其價值を減少するものに非ず。耶穌の時に當り猶太國民の間に行はれたりし道徳の教訓は豊富にして且深遠なるものなりき。パリサイ人の道徳的思想を評するに方り、唯其の兒戲的、便宜的方面のみを見て他を見ざるは公平なる觀察に非ず。彼等の道徳は當時宗教と混交し、儀禮と同一視せられ、其神

聖の德義あるものも全く之と反對せるものと變化したりしは事實也。と雖も、尙多少の生命の根柢に存在するものありて全く死滅したるには非ざりき。故に耶穌は彼に問ひし者に答へて、「爾は律法を有し且之を守れり、爾は能く爾の爲すべきことを知れり、律法の要は爾の云へるが如く、神を愛し隣を愛する事是也」と云へり。然れ共耶穌は更に特有の倫理的思想を有し、且之を傳へたり。吾人は今四個の要點を擧げて之を明にすべし。

第一、耶穌は當時道徳と宗教的儀禮との間に存在したりし關係を分離したり。彼は宗教上の儀式と關聯せる善行に就ては全然無頓着なりき。而して彼は其隣人否其兩親さへも養はずして神殿に犠牲を献ぐるものを叱責し、少しも容赦する所なかりき。彼の教訓に従へば愛と恩恵とは夫れ自ら目的にして、若し人の爲に役事するに非ずんば凡て其價值を失ふ也。

第二、耶蘇は道徳上の問題を論ずるに方り直に其根本に溯り、人の性情意志に入れり、基督の所謂「最高の義」は唯此の如くにして初めて了解し得べし。『最高の義』とは即ち人心の奥底に存在せるもの也。吾人は此處にも亦一見簡單明白なる表明を見る也。然れ共耶蘇は此眞理を表明するに最も嚴格なる形状を以てせり。即ち云く「古の人に告げて……」と云へるは爾曹の聞きし所也。去れど我爾曹に告げん云々と彼の教へたる眞理は新なるものなりき。而して彼は何人も未だ此の如き形状と要求とを以て其眞理を表白せるものあるを見ざりき。所謂山上の説教なるものは人生百般の事を論ずるに方り直ちに其性情意志に溯り、其光明に照して人の行爲を判定したるもの也。

第三、耶蘇は宗教的儀式より分割し、道徳的主義として承認せるものを以て唯一の根本、唯一の動機となしたり。愛即ち是也。彼は此外何物をも認めざりき。而して愛は或は發して隣を愛するものとなり、或は顯はれ

て敵を愛するものとなるも同じく一也。而して此愛は人心に充滿せざる可らず。此意味に於て愛は既に萌せる新生命也。然れ共此愛は常に役事するものならざる可らず。此の如くして愛は初めて生き、初めて存在する也。

第四、耶蘇が道徳を凡ての關係より分離し、又之を宗教的儀禮より分離したりとの事は以上述べたるが如し。故に福音は普通倫理の事也といふも全く耶蘇を誤解したるものには非ず。然れ共耶蘇は又宗教と道徳とを結合せり。是れ最も重要な點也。雖も之を明白に表明するは頗る困難也。吾人は唯之を感すべきのみ。耶蘇が宣言せる祝福の見地より之を論ずれば或は之を謙遜と稱すべきか。彼は愛と謙遜とを以て同一となしたり。而して謙遜は夫れ自ら徳たること能はず、全然受容的にして人心要求の表明、神の恩寵と赦罪の祈願、更に一言を以て之を約すれば神に向て其心を打ち開くる事是也。耶蘇の云ふ所に従へば此謙遜は

吾人が神を愛するの愛也。例之パリサイ人と税吏の譬喩を見るべし。又善なる者に向ふ人心の傾向にして万善の依て生ずる根源也。我儕に罪を犯すものを我儕が赦す如く我儕の罪をも赦し玉へ」とは即ち謙遜と愛の祈也。而して是れ吾人が各々隣人を愛する愛の源泉也。

此意義に於て耶蘇之宗教と道德とを結合せり。此意義に於て宗教は道德の靈魂にして、道德は宗教の身体也といふを得べし。而して吾人は此の如くして耶蘇が神を愛するの愛と人を愛するの愛とを兩々對峙せしめたる所以を了解すべし。要するに人を愛するの愛は神を愛する愛の地上に於て實際に活動せるものたるを知るべき也。

耶蘇は以上四箇の點に於て最高の義と愛の新しい誠とを表明し以て倫理の範圍を規定したり。吾人若し彼の意義如何を疑はば、須く此山上祝福の説教に就て之を熟思すべし。山上祝福の説教は其根本に於て一致し、而して外形的要素より分離せる彼の宗教と道德とを包有せるもの也。

の也。

吾人は更に他の聖句を取りて耶蘇が宗教の實際的證據は人に對する愛を活動するに在りとの事を承認したりし事を示すべし。即ち耶蘇が傳道の終に方りて語り玉へる牧者が綿羊と山羊を其の左右に分つとの喩話是也。此喩話に於て牧者が綿羊と山羊を分てる唯一の主義は仁惠の問題也。彼等は果して耶蘇に飲食せしめたりしや、彼を見舞たりしや、此問題は宗教的のものとして問はれたり。而して之に對する答は即ち左の如し、云く「既に爾曹我が此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひし也。是れ即ち耶蘇の説に従へば仁惠を行ふものは宗教上正當なる地位に居るものなることを最も能く證明せるもの也。何が故に然るか、云く、仁惠を行ふは即ち神に倣ふが故也。神は目を以て目を償ひ、齒を以て齒を償ふが如きものに非ずして、其義は其仁惠に伴ふもの也。故に仁惠を行ふは即ち神の特權を行ふ也。」

宗教の歴史は非常の進歩を示せり、一方に於ては希臘の詩人及哲學家に依り、他方に在ては猶太の預言者に依りて義及び義なる神の思想は生ける力となれり、希臘の諸神は高められたり、猶太のエホバは聖なる神とされり、此の如くして從來分離したりし宗教と道徳との二分野は密接の關係を有するに至れり、神は聖く且義しければ也、吾人の歴史は此の如くして進歩せり、此進歩なくんば人類なるものなく、又高尚ある意義に於て世界の歴史と稱すべきものなし、而して此進歩を來せる直接の結果は一言にして之を云へば、凡て人に爲られんと思ふとは爾曹人にも亦其如くせよ』といへる格言に約し得べし、而して是れ一見甚だ不充分なる言語の如しと雖も、之を人生百般の事に及ぼし、而して實に此の如く行はば、此中には偉大なる開明的勢力を有する也、然れ共仁恵にして全く義に代はり、兄弟の念と犠牲の思想無上の權力を占むるに非ずんば未だ吾人の達し得べき最高の進歩に達せりとい

ふ可らず、凡そ人にせられんと思ふことは人にも亦其如くせよ』との格言は之を正當に了解すれば吾人の生活を判定する新法則となるべく、又「其生命を失ふものは之を得べし」との思想は此格言と共に人の生命は此限りある時に繋かれ、此目に見ゆる物質世界に根ざすものに非ずとの事を吾人に教ふるもの也。

以上吾人は神の國、神の父なる事及び人類無限の價值及び愛に顯はれたる最高の義に就て述べたり、而して此三者は事實に於て相關聯せり、何とされば神の國は畢竟吾人の靈魂が永遠無究にして仁慈ある神の中に有する財寶に外ならざれば也。

ハーナツクは右述ぶるが如く耶蘇教訓の根本的思想を論じ終りて、更に福音と諸種の問題との關係に論及せり、而して彼は最も重要なる問題六箇を撰べり、即ち左の如し。

一、福音と此世との關係即ち遁世主義の問題

- 二、福音と貧者との關係即ち社會問題
 - 三、福音と律法との關係即ち秩序の問題
 - 四、福音と事業との關係即ち文明の問題
 - 五、福音と神子との關係即ち基督論の問題
 - 六、福音と教理との關係即ち信條の問題
- 吾人は更に序を追ふて著者の議論を紹介すべし。

(十二)

福音と此世との關係、即ち遁世主義の問題

基督教は佛教と同じく遁世主義の宗教なるべきや是れハ一ナツクが
 此章に於て論せんとする所也。著者の答は勿論否定的にして必ずしも
 新奇なる議論に非ずと雖も、亦能く基督教の世に對する關係を明にせ

り、豈一讀の價勿らんや。

福音は要するに嚴格なる遁世主義の宗教にして、其重要なる點も亦爰
 に在りとは廣く世に流布せる說にして、唯に羅馬教會に於て勢力ある
 のみならず、新教徒の中にも尙此說を奉ずる者あり。或人々は唯に福音
 の此方面に向て同情を表し之を稱賛するのみならず、之を皇張誇大し
 て、真正なる基督教の意義及び價値は佛教の如く世を否むに在りと論
 じ、又或人々は近世の倫理說と福音との調和し難き者なるを示し、倫理
 の無益なるを證せんとして殊に福音書中の厭世的教訓を過重せり。
 羅馬教會は前既に云へる如く、福音書中の厭世的教訓を承認し、真正の
 基督教的な生活は唯僧院的生活を送る事に依りてのみ遂げらるべしと
 の事を教ふ。尤も彼等は遁世主義なき下等の基督教も亦存在し得べき
 事を承認し、通常の信徒は之を以て満足し得べきものと論すれ共、吾
 人は今此讓歩に就て云はざるべし、要するに羅馬教は僧侶のみ眞に基

一 昔に從ひ得べしと教ふる也。第十九世紀に生れたる一大哲學者にして且一大著述者なるシヨールベンハウエルも亦此説を主張せり。彼の基督を稱賛するは聖アントニー若くは聖フランシスの如き通世者を生じ得るが故にして、之を外にしては基督教は彼には無用あるもの、礙どあるもの也。彼よりも更に深邃ある智識と、強き感情と力ある言語とを以て此説を主張せるはトルストイ伯也。伯は福音の厭世的要素に至大の重を置き之を以て其行為の標準となせり。伯が福音書中より得來れる厭世的理想の中には隣人の爲に役事することをも含蓄し、熱心と力とを以て之を吾人に示せるは否むべからざる事實なれ共、伯は亦通世を以て基督教の最も重要なる特質也となせり。教育ある讀者の中には伯の此説を以て教訓と奨勵とを與ふる者となせども、其心底に於ては基督教の通世的宗教なるを知りたるを喜ぶもの甚少からざる也。夫れ此世界は吾人が爲し得る範圍に於て最も賢く之を使用せん爲め造られたるもの也。故に若し基督教にして此世の生活に一の目的を與へず、萬事悉く來世に在りとなし、地上の幸福は凡て價值なく、世を遁れ默想的の生活を爲す事のみ獨り益ありとなさば、吾人は決して之を承認すること能はず。何となれば吾人は能力なるものを與へられ、而して此能力は地上に於て用ゐられ、鍛へらるべきものなるを知れば也。

去れ共福音なるものは眞實に通世主義の宗教なるべきや、之を然りとすものには許多の聖句を取りて之が證とあす也。例之基督が「若し右の眼爾を罪に陥さば抉出して之を棄てよ、若し右の手爾を罪に陥さば之を斷りて棄てよ」といへるが如き、又富める少年に答へて「全からん事を思は、往きて爾が所有を賣りて貧者に施せ、さすれば天に於て財あるらん、而して來りて我に從へ」と云へるが如き、「天國の爲め自ら寺人となれる者あり」と云へるが如き、又「凡そ我に來りて其父母妻子兄弟姉妹又己の生命をも憎む者に非ざれば我弟子となることを得ず」と云へる如

言は、一見福音の本質は全く世を避け世を棄つるに在るを證するが如し。然れ共余は之に反對する三箇の事柄を擧ぐべし、即ち第一は耶穌が此世に於て取り玉へる生活の方法、第二は彼が其弟子等に與へ玉へる印象にして第三は彼が其使命に關して宜へる言語是也、今左に之を略述すべし。

一、吾人は福音書中に左の如き言語を發見すべし。云く、「ヨハ子來りて食ふこと飲むことをせざれば鬼に憑れたる者也。人々言へり、人の子來りて食ふことをし飲むことをすれば又食を嗜み酒を好む人、稅吏罪あるもの、友也と云ふ」と。即ち耶穌は種々の罵詈雑言の名に加へて、食を嗜むもの、酒を好む人もと呼ばれたりしを見るべし。然らば則ち耶穌の生活行爲はヨルダン河畔に悔改のバプテスマを宣傳へたる預言者と全く異りたる者也との印象を猶太人に與へたりし事甚だ明也。彼は實に通世的行爲に向ては全く無頓着の態度を取りたりき。即ち彼は富める

者、貧しきもの、婦人、小兒に拘はらず何人の家に往きても食事を共にし、且傳説に依れば婚姻の席にも列したりしと云へり。彼は其足を洗ひ、其頭に膏ぬる事さへも許したりき。而して彼はマリヤ、マルタなる姉妹の家にも宿り、彼等の家を去るを求め玉はざりき。彼は人々の彼を信じて來るを見るや喜んで之を受けしかども、彼等をして其職業を爲し其地位に止まらしめ、敢て其所有を賣りて彼に従へど命せざりき。彼は實に彼を信する人々が神の召し玉へる地位に安するを以て至當也と思惟したりし也。彼の弟子と稱するものは單に彼が直接に召して彼に従はしめたりし少數人のみに非ざりき。彼は至る所に神の小兒を發見せり、而して彼は貧賤の所に之を發見し、安慰の言を之に與ふるを以て至上の喜ぶ事したりき。彼は其弟子を僧侶とはなさざりき。彼は又彼等に日々何を爲すべきや、又何を爲すべからずやに就て一々指導を與ふるが如きことを爲さざりき。公平の心を以て福音書を讀むものは何人も耶

蘇が全く遁世主義の思想を離れたりしを了解すべし。若し夫れ遁世主義を含蓄せるが如く見ゆる言語の如きは之を嚴格ある意義に解釋すべからず、又之を福音書全般の主意也と思惟すべからず、宜しく之を廣き關係に於て高き立脚地より解釋すべき也。

二、耶穌の弟子等が耶穌を以て世を棄てたる遁世家也と思惟せざりしとは甚明也。吾人は後章に至り彼等が福音の爲に獻げたりし犠牲は何なりしか、又彼等は如何ある意味に於て世を棄てたりしかを説くべし。然れ共彼等が遁世的行爲を重要視せざりしは明也。彼等は働者は其工錢を受くべきもの也との主義を持ち、又基督を信じたるが爲め其妻を去るが如きとをなさざりき。吾人は偶然にも彼得が其傳道の旅程に妻を伴ひしとを學ぶ也。エルサレムに在る信徒等が財産を共有したりしとの事を外にしては、此記事は信すべからず、又遁世的の性質を帶ぶるものにも非ざれば、今之を措て論せず。吾人は使徒時代の基督教徒が

遁世的主義を有せりとの事は何れに於ても發見すると能はず。吾人は之に反して基督信徒たるものは神の與へ玉ふ職業、位地及び状態に在るべきもの也との確信當時信徒の間に行はれたりしを發見する也。亦以て基督教が初めより佛教と其發達を異にせるを見るべき也。
三、是れ最も重要な箇條也。余は讀者が余が耶穌の根本的思想に就て述べたりし所を回憶せられんことを望む。神に於ける信仰、謙遜、赦罪及び人を愛すべき事の吾人に示す範圍に於ては之に異なる教訓の入るべき餘地なし。且耶穌は神の國は如何なる意義に於て世と反せるものなるかを明にせり。夫の「思ひ煩ふ勿れ」「爾の父の天に於て仁恵あるが如く仁恵あるべし」等の言語を以て遁世的行爲と聯繫し、之を同一視するものゝ如きは、此等の言語を了解せざるものにして、彼等は未だ曾て神との一致調和の思想に達したることなきものか、然らずんば此感情を失へるもの也。

以上の理由に依り吾人は福音を以て世を棄て、世を遁るゝことを教ふるもの也となすの說に反對せざるを得ず。

而して吾人は耶穌が他方に於て三の敵なるものに就て語れるを見る。

三の敵とは財、愛慮及び私慾にして、耶穌が此等のものに對して吾人の取るべき態度として與へられたる警語は彼等より逃げよとの事に非ずして、彼等を滅し盡せよとの事也。避けよ、遁れよとの事に非ずして、彼等が滅盡する迄戦へよとの事也。財とは金錢及び廣濶なる意義に於て世の財貨一切をいふ世の財貨は吾人を擒にして其奴隸となし、又吾人をして之に依て他の者を壓抑せしむるもの也。金錢は實に權力也。耶穌は此敵を以て宛も武具を纏へる武士若しくは王若しくは惡魔自らの如きものとして語れり。彼が「人は二人の主に兼ね事ふること能はず」と云へるは即ち此敵を指せる也。人若し世の財に至大の重を置き、心常に愛に在りて、只管之を失はん事を恐れ、之を棄つることを忍ばざらんか、是れ既に財の浮塵となりたる也。故に基督教徒なるものは一たび此危険身に迫るものあるを感せば、宜しく之と戦ふべきのみならず、戦て遂に之を滅亡せしめざるべからず。

第二の敵は愛慮也。耶穌が愛慮を以て恐るべき敵となせるは一見吾人を驚かすべし。彼は實に之を以て異教と同一視せり。彼が主の祈に於て「我儕に日用の糧を與へ玉へ」と祈るべきを吾人に教へたるは事實也。

然れ共此の如く神に信頼せる要求は彼の愛慮と呼ぶ所のものに非ず。彼の所謂愛慮とは吾人を日用物質的事物の奴隸となす所のもの也。吾人が之に依て遂に不知不識の間に世の犠牲となり了する所のもの也。愛慮は屋上の雀さへ保護し玉ふ神を凌辱する也。天に在ます父との根本的關係を破壊する也。小兒の如き信仰を失ひ、遂に吾人の靈魂を零落せしむる也。此點に於て吾人は又耶穌の吾人に教へたる眞理を最も深く感ずるものに非ざるを告白せざるを得ず。然れ共吾人は又凡て

の憂慮を棄て悉く之を神に任ずるに非ざれば眞に自由に眞に強くなること能はざるを感ずる所のもの也。然り吾人若し眞に自由ならずんば嗚呼亦何をか爲し得んや。

第三の敵は私慾也。耶蘇の吾人に要求せる所のものは遁世に非ずして克己也。己を棄つる點迄己に克つこと也。彼云く「若し右の眼爾を罪に陥さば抉出して之を棄てよ。若し右の手爾を罪に陥さば斷りて之を棄てよ」と。若し情慾盛にして吾人を擒にせんとするか、若くは私慾吾人の主とならんとすることあらば吾人は之を滅盡せざる可らず。是れ吾人此の如くするに非ずんば吾人の善良なる部分を保護すること能はざるが爲にして、神吾人を不具となすを喜び玉ふが故に非ず。是れ實に吾人に取りては困難なる要求也。然れ共吾人は僧侶の如く全く身を棄つることに依りて之を爲すを要せず。唯危急の場合に臨み斷然たる決心を以て争ひ、而して自ら克つを得ば足れりとする也。

財、憂慮及び私慾なる敵に對して吾人の取るべき道は克己也。於此乎基督教と遁世主義との關係甚明也。遁世主義は云く、凡て世の幸福は本來價值なきもの也。然れ共福音は云く「地と之に滿つるものは主のもの也」と。福音に依りて吾人の問ふべき問題は是也。云く、余は財産、名譽及び朋友、親戚を有するを以て幸福と考ふべきか。若くは之を棄てざるべからざるか。而して福音の吾人に答ふる所は眞面目に自ら吟味し、熱心に自ら戒め、而して敵を滅ぼすべしとの事是也。然れ共耶穌は吾人が今日實際に思惟するよりも更に深く克己と献身を吾人に要求したりし事疑あるべからず。

以上述べたる所を略言すれば福音は遁世主義に非ず。何と云へば福音は神に於ける信仰、謙遜、赦罪及び仁恵の宗教なれば也。又世の幸福あるものは悪魔より出づるものに非ず。神より出づるもの也。耶穌故に云く、「爾曹の天の父は此等のものゝおきてならぬ事を知り玉へり」と。又云く、

「天の父は天空の鳥を養ひ、野の百合花を装はせ玉ふ」と、福音の中には
 遁世主義更に在ることなし。其吾人に要求する所のものは世の財憂慮
 及び私慾と戦ふべしとの事也。人の爲に使はるゝを厭はざる愛、自己を
 献ぐる犠牲の精神を有すべしとの事也。之を外にして耶穌の使命を了
 解せんとするものは決して其眞義を悟ること能はず。又其偉大莊嚴を
 解すること能はず。何とあれば耶穌の教訓に於ては、凡ての所有を施し
 又焚かるゝ爲に身を與ふる』より更に重要なる事あり、愛と克己即ち是
 なれば也。

(十三)

福音と貧者との關係即ち社會問題 (上)

著者は此問題に關し二箇の極端なる説を掲げ來りて之を排斥し、基督

は社會問題を解釋せん爲に世に來りたるに非ず、然れ共基督の宗教程
 此問題に密接の關係を有し、至大の力を興ふるものなしとの事を論せ
 り。吾人は基督教と社會問題との關係を最もよく解釋したるものとし
 て之を賛同するに躊躇せざるべし。

著者云く、此問題に關しても吾人は近時普く世に行はるゝ異説、即ち二
 箇の相反せる説と戦はざるべからず。論者云く、福音なるものは元來貧
 者を救はんどの社會的的使命にして、其他のものは畢竟之に附隨するも
 のに外ならずと。彼等の信する處に依れば耶穌は社會的大改革家にし
 て、當時貧苦の中に呻吟せる下等の賤民を困弊の中に救はんとしたり
 し也。故に彼は四民の平等を認め、經濟上の困難と社會の壓制より彼等
 を救ふべき方案を立てたりし也。論者は以えらく、耶穌は此の如くして
 のみ領解せられ得べしと。此説に従て福音を解釋せんとする幾多の著
 者は過去數年間に於て出版せられたり、彼等が斯の如く論ずるは耶穌

を辯護し、推薦せんとせるものにして、其目的の善良なるは論を要せず。然れども福音を以て同じく社會的使命也と論する者の中にも全く之に反せる結論をなせるものあり。其説に云く、耶穌の使命は全く經濟的革命を來らせんと目的に出でたるものなれ共、是れ畢竟架空無用の方策たるに過ぎず。耶穌の世界觀は溫和なるものなりき、然れども亦薄弱なるものなりき、彼は貧賤に生れたりしが故に自ら富者の猜疑を招くを免れざりき、彼は凡て有益ある世の職業を擯斥したりき、彼は富を得るの必要を了解すること能はざりき、故に彼は天下に向て貧究を傳へ、地に於ける艱苦と對比して天國を建設せんとの方策を立てたりき。是れ到底實行し難き方策にして、又勢力あるもの、首肯し難き所也。此の如き説は福音を以て社會的使命となす論者の他の一種が主張する所也。

之に反して福音に關し全く之と異りたる説を主張せるものあり。其説

に云く、福音の中には多少耶穌が當時の社會及び經濟上の状態に關して興味を有したりし跡なきに非ずと雖も、福音あるものは元來經濟上の問題と何等の關係をも有するものに非ず。耶穌が其教訓を説明する爲に經濟上の事例を借り、又自ら貧民、病者及び不幸の人に同情を寄せ玉ひしは明なる事實なれ共、其純粹なる宗教的の教訓と彼が彼等を救ひ玉ひし行爲とは彼等が地上の有様を改良せん爲になされたるものに非ず。耶穌の目的を以て單に社會的なりしとなすは彼の教訓と行爲とを俗化するもの也と、而して耶穌を以て當時存在したりし社會的制度を神の立てたるものとして保護せんとしたりし保守家なりとなすものも亦鮮からざる也。

此の如く此問題に關しては二種の全く相反せる議論ありて各々熱心に其説を主張せり。然らば則ち吾人の取るべき説如何、吾人若し事實の真相を得んと欲せば先づ耶穌の生活したりし當時の状態を観察せざ

る可らず。耶蘇の生れたりし當時及び其以前に於てパレスティンに於ける社會上の状態に關しては吾人の智識十分也といふを得ざれ共、尙吾人は數多重要な事實に就て知る也。殊に吾人は明に二箇の事實を知れり。

當時國民を支配せるもの、中にはパリサイ及び祭司なるものを含蓄したりしが、此等の所謂上等社會と稱せられたるものは少しも貧民に對する同情を有せざりき。凡そ何れの時何れの國に在ても上等社會なるものは概して善良なるものに非ず。當時猶太の上等社會なるもの必ずしも他に勝りて惡しきには非ざりしなるべし、然れ共彼等の状態は慥に惡しきものなりき。且彼等は神を禮拜することに甚熱心なりしかども、貧しきものを憐れみ之に同情を表することを爲さざりき。富者が貧者に對する暴虐壓制は既に長く詩篇の作者及び深厚なる同情を有するもの、語り傳へたる題目なりき。若し彼等にして果して能く其義務を盡したりしならんには耶蘇も亦彼が如く嚴酷に彼等を詰責し玉はざりしなるべし。

然るに之に反して貧苦困難の中に在りて常に富者の壓抑を蒙り、不幸災厄の中に生活する多數の國民中には熱心堅固なる希望を以て神の約束を信じ、謙遜忍耐して救の來らん日を待てるものありき。彼等は身貧にして屢々神殿に捧ぐるものさへも有せざりき。此の如くして彼等は輕蔑せられ、壓抑せられ、酷待せられ、擯斥せられ、目を擧げて神殿を見ることさへ能はざりしかども、常にイスラエルの神を望みて、「斥候よ、夜は何の時ぞ」と熱心に祈りし也。此の如く彼等の心は神に向て開け、常に神を受けんと備へつゝありし也。故に詩篇及び其後に著はされたる猶太文學の中には「貧しき」なる文字は直ちに其心を開きてイスラエルの救を待ち望めるものを指すの名となれり。耶蘇は斯る慣例あるを知り、自ら之を採用し玉ひし也。故に吾人は福音書中「貧」なる文字を解釋する

に方りて單に之を經濟上の意義よりのみすべからず素より經濟上の意義に於ける貧者は多くの場合に於て神に向て其心を開ける謙遜なる者と事實同一なるものなりき彼等は實に夫の傲慢にして唯規則的に義を守れるパリサイの徒と相對して好一對をなせるものなりき又當時貧なる文字の中に經濟上の意義をも含蓄したりし事は吾人の忘る可らざる處也と雖も貧富の範疇を以て直ちに吾人が今日了解するものと同一なるものと思惟すべからず然らば則ち耶蘇の所謂「貧」なる言の内容に含蓄せる意義如何是れ吾人の研究すべき問題也。

(十四)

福音と貧者との關係即ち社會問題 (下)

耶蘇の所謂貧者とは概言すれば神に向て其心を開ける者の謂也故に

耶蘇の言を以て直ちに一般の貧民に應用し難し左れば吾人が社會問題を論ずるに方りては須らく耶蘇が精神的貧者に就て言へる凡ての語を除かざる可らず例之所謂九福の説教中第一福の如し吾人は假令之を路加傳の形狀に於て了解するも亦馬太傳の形狀に於て了解するも耶蘇の所謂貧しき者とは其心を神に向て開けるものなること之を他の八福に比して甚明也去れ共吾人は今耶蘇の語を一々吟味するの暇勿れば最も重要な點に就て考察するを以て満足せざる可らず。耶蘇は世の財貨を所有する事を以て吾人の心を頑梗ならしむる事として地上の憂慮に吾人の心を亂さしむる事として世俗的の快樂に吾人を誘ふ事として吾人の靈魂に最も危険なる事となせり故に云く「富める者の天國に入るは如何に難いかな」と。去れ共耶蘇は天國を建設する基礎を造らん爲め先づ貧窮困苦の状態を來さん事を期圖し玉ひしと云へるは誤也否事實は之に反せり彼は

欠乏を欠乏と呼び災害を災害と呼べり。彼が此等のものを獎勵せざりしは言ふ迄もなし。彼は之と戦ひ之を滅さん爲に最も強大なる努力を爲したり。彼がはたらきは此意味に於て人を救はんどののはたらきなり。換言すれば悪と欠乏とに對する争なり。否吾人は時として耶蘇はアマリに貧究と困苦の苦痛を極言せるには非ざるか。彼は此事にアマリ多く關係せるには非ざるか。彼が道德上の教訓は此貧究困苦を救はんとして慈恵と同情にアマリ多くの重を置きたるには非ざるか。思惟する事あり。然れども此等の考は共に正當なるものに非ず。彼は欠乏よりも災害よりも尙恐るべき最悪のものあるを知りたり。罪即ち是也。而して又彼は他方に於て慈恵よりも更に大なる力あるを知りたり。救罪即ち是也。彼の教訓と行爲とは此點に於て亦疑を容るべし。非ず。去れば耶蘇は何れの處に在ても曾て貧究と災害と獎勵せんと期圖したりし事なきのみならず。彼自ら此等のものと戦ひ、又之と戦ふべき

ことを命じ玉へり。基督教會の中には乞巧的生活を鼓舞し貧究を獎勵したる基督教徒ありし時代なきに非ざりしと雖も、之を以て耶蘇の命に従ひたりしとなすこと能はず。耶蘇が其生涯を福音の宣傳に従事せんとせる者に向て、世の財貨の念を棄てざる可らずと命じ玉へるは事實也。雖も、彼は之を凡ての人に向て要求し玉ひしに非ず。唯特別の天賜を有し、特別に神より召されたる者に向て要求し玉ひしのみ。且此場合に在ても彼は決して彼等に向て乞巧の生活を爲すべしと命じ玉ひしに非ず。否彼は福音の爲に其生涯を献げたるものは必らずパンを得るの道を有すべしとの事を確證し玉ひしのみ。彼の意義の斯の如くなりし事は福音書中には偶然にも脱漏したれ共、使徒保羅が哥林多前書第九章に於て吾人に傳へたる耶蘇の言に依りて知るべし。云く、「主福音を宣傳ふる者は福音に由りて生活んことを定め玉へり」と。耶蘇が福音の宣傳者に向て世の所有を有すべからずと云ひ玉ひし所以のものは

則ち彼等をして全く福音に由りて生活せしめんが爲め也。左れ共彼は決して彼等をして乞巧的の生活を爲せよと命じ玉ひしに非ず。然るを斯の如く思惟したるものはフランシスカン教徒が彼の言を誤解して之に他の意義を附したりしに外ならざる也。

事の序を以れ一言せしめよ、概言するに福音の宣傳を以て業とせる基督教會員、即ち各々其教區に在りて神の言を宣ふる基督教の教師なるものは、世の所有を棄つべしと云へる主の命令に従ふの必要を見ざりき。異教國に派遣せられたる宣教師は暫く措て之を云はず、教師若しくは牧師と稱するものに就て之を云ふに此命令は彼等に與へられたるものに非ずといふを得べし。又愛に關せる誠以上に主の與へ玉へる命令は、之に背くべからざる律法として見る可らずといふことを得べし、何となれば然らずんば基督教徒の自由損害せらるゝに至るべく、又歴史の進歩に従ひ如何なる形狀をも自由に採用し得べしといへる基督

教の特權侵害せらるゝに至るべければ也。然れ共吾人は尙問ふことを得べし、若し宣教師、牧師と稱する福音の宣傳者たるものにして主の命令に従ふことを得ば是れ豈に基督教に取りて非常の利益に非ずやと。少くとも彼等は此世の財貨に於て他人の礙とならざる様嚴格なる主義に依て自ら行はざる可らず。余は世人が靈魂の救済に従事するものが奢侈の生活を爲すを許さざる事司祭的政治を許さざる如くなるべき時の來らん事を疑はざるもの也。此點に關し世人の感情は大に進歩せり、是れ實に基督教の利益也。吾人は最早自ら富み且其財產増殖に熱心なるものにして、貧者に向ひ其分に安すべきを説くは適當なる事也。と思惟せざる也。健康なるものは病者に安慰を與へ得べし、然れ共自ら多の産業を有するもの如何にして能く貧者に向て世の財貨の價値なき事を説服せしめ得可んや。去れば神の言の使者たるものは世の財貨を有すべからずといへる主の命令は、尙基督教會の歴史に於て敬重せ

らるゝの時來るべき也。

若し方策なる文字は或一定の方法規則を云ふものなりとせば耶蘇は貧困、究苦を救ふ爲に社會的方策を立てたるとなし、彼は毫も其當時の經濟的狀態に干渉せざりき、彼若し當時の狀態に干渉しパレスタインの爲に必要な律法を造りたりとせば抑も彼は之に依りて何の得る所ありしや、或は當時の必要に應ずることを得たりしとするも、此の如きものは直ちに廢物となりて長く福音の妨害となりしなるべし、吾人は「凡て爾に求めば之に與へよ」と云へるが如き命令を解するに方りては、其意義の範圍を超ゆるざるやう注意せざる可らず、此等の命令は時と場所とに従て了解すべきものにして、一片のパン、一杯の水若くは身に纏ふべき粗衣を以て満足せるもの、現下の要求に應ずべきを説けるもの也、吾人は福音書を讀むに方りて、身東洋に在り、且經濟上の狀態尙發達せざりし時に在りしを記憶せざる可らず、耶蘇は社會改革家にては

あらざりき、彼は曾て云へり、「貧者は常に爾曹と共に在り」と、是れ社會の狀態は常に變化する者に非ざるを云へる也、彼は遺物を我に分てよと請へる兄弟の争訟に裁判を下すを拒みたりき。

彼は凡て經濟及び社會的生活に關する問題に容喙することを以て不當の要求として斥けたりき、然るに世人は幾度も福音書中より社會的方策を得んと試みたりき、福音主義の神學者さへ之と均しき企劃を爲し、又現に爲しつゝある也、然れ共此の如き企劃は唯に無益にして且危険なるのみならず、舊約聖書より得たる規則、方法を以て福音書中の欠を補はんとするに至りては、斷然許容すべからざるもの也。

以上は著者が福音を以て社會的方策と同一視せるもの、誤謬を指摘し、福音の眞面目を明にしたるものなれ共、著者は又他方に於て基督教程此問題に密接の關係を有し、至大の力を與ふるものなしとの事實を認めたり、故に彼は語を次で左の如く云へり。

何れの宗教も、佛教さへも吾人が福音書に於て見るが如く至大の力を以て社會的的使命を論じ、又之と同一化したるものあること亦し其故如何、他なし福音書に於ては「爾の如く爾の隣を愛すべし」どの言最も深厚ある熱心を以て語られたれば也。耶穌は此等の言を以て、飢渴、貧困、災厄の世界に光明を與へ玉ひたれば也。又彼は之を以て唯一の宗教的格言として語り玉ひたれば也。試に夫の末日審判の喩話を見よ、彼處には人の價值及び運命は彼が如何に隣人を愛したりしかに依りて定まるものなる事を教へたり。又富者どあはれなるラザロの喩話を見よ、余は又爰に他の物語を引くべし。以下記す所の言語は「希伯來人の福音」に記せるものを寫せるものにして、福音書より取りたるものに非ず。是れ即ち富める少年の物語にして、其書の吾人に傳ふる所左の如し。云く、「或る富める人主に云ひけるは、主よ、我れ生命を得んが爲には何の善事をあすべしか、彼に曰ひけるは、人よ、律法と預言を守るべし、彼答へけるは、是れ

我が守れる所のもの也、彼れ曰ひけるは、往きて爾が所有を悉く售りて貧者に施せ、而して來り我に従へ、富者之を聞きて其頭を掻けり、其言彼の心を喜ばしめざりき、主彼に曰ひけるは、去らば爾如何にして我れ律法と預言を守れりと云ふや、律法は録して爾の如く爾の隣を愛すべしといふに非ずや、見よ、爾の多くの兄弟、アブラハムの子等は汚れたる檻檻に寝ね、飢餓に死せるに、爾の家は多くの善きものを以て満ち、而して何物も彼等の爲に其中より出で來らざる也」と。又以て耶穌は如何に貧者の欠乏を思ひ、又「爾の如く爾の隣人を愛すべし」どの誠に依りて斯る貧苦を救はんとし玉ひしかを見るべし。若し人其側に在るもの、饑へ且死するを見て之を救はずんば決して其隣を愛すといふ可らず。福音は唯に人は相共に立つものにして互に助けざる可らざるものなる事を教ふるのみならず、其眞の目的の存する所も亦爰に在り。此意味に於て福音は個人的なると共に社會的也、何となれば福音は各人の靈魂の

價值は無限にして且各々獨立せるものあることを教ふれば也去れば福音なるものが人類の合一と友義とを進捗するの傾向ありしは偶然の現象に非ずして、其性質の重要な顯現也といふべし。夫れ福音は人類の中に最も廣濶なる社會を建設せんとする者にして、或人の云へりし如く競争を基礎とせる社會主義を變じて、精神的合一の意識を基礎とせる社會主義となすは其最も大切なる目的也。此意義に於ける福音の社會的使命は吾人決して之を過重すると能はず。抑も人をして存在するの價值わらしむるものは何ぞ之に關する世人の思想は時勢の進歩と共に變化し、進歩し來りたるは感謝すべき事也。然れ共耶穌は又此點に就き事物を計量するの道を知れり。彼は嘗て其反對者に向て云はすや、「狐は穴あり、天空の鳥は巢あり、去れど人の子は枕する處なし」と。衣食住凡て日常生活に必要なものを満足に得るの必要なは耶穌の認め玉ひし所也。若し人自己の爲に之を得ること能はずんば他人來り

て彼の爲に之を得ざる可らず。故に耶穌もし今日吾人と共に在り玉は貧者を助け、彼等の状態を改良せん爲に努力せるものに向て同情を表し玉ふべき事疑なし。夫の自由放任、生存競争主義の如きは全く福音の主義に反對せるもの也。而して吾人は奴僕としてに非ず、吾人の兄弟として貧者を助けざる可らず。最後に一言すべきは吾人の有する富なるものは吾人にのみ屬するものに非ずとの事也。福音書中には吾人は如何に其富を使用すべきかに就て別に規則を設くることなし。然れ共福音は明に吾人は富の所有者に非ずして管理者なる事を教へたり。否、耶穌は人類の中に富を以て全く私有財産となさざる社會の成立し得べき事を思考したりしが如し。然れ共吾人今此問題を決するは容易の事に非ず、又之を決するの必要なし。此問題の中には耶穌の來世に關する思想入り來る可ければ也。要するに吾人の最も必要とする處は耶穌が其弟子等の心に起さしめ玉

ひし貧者に對する性情是れ也。

福音は眞面目にして且有力なる社會的使命也、人は相互に兄弟姉妹にして、孤立すべきものに非ず、故に貧者を保護せざる可らずとの事を宣言するもの也、然れ共此使命は靈魂無限の價値の承認に伴はれ、又神の國に就て耶穌の語り玉へる言語の中に含蓄せらるゝ也、吾人は又是れ耶穌の教へ玉へる言の中最も重要なるもの、一なりとの事を斷言し得べしと雖も、吾人は吾人の生活する時代の状態を變化すべきことを命ずる律法若くは命令なるものを福音書中に發見すること能はざる也。

(十五)

福音と律法との關係即ち秩序の問題 (上)

福音と律法との關係には二個の重なる問題を含有す、即ち(一)福音と國家の權威との關係、(二)福音と「國家の權威」なる觀念中に含有せるよりも廣濶なる範圍に於ける律法との關係是也、誤りなく第一の問題に答ふるは容易の事に非ず、然れ共第二の問題は更に複雑にして一層大なる困難を以て圍繞せられ、之に對する解説も亦區々也。

耶穌が國家の權威に對せる關係に就ては余既に彼の政治的革命家に非ず、又別に政治上の方策なるものを有せざりしとの事を述べたれば、今再び爰に之を云ふを要せず、彼は彼若し天の父に求めば十二軍餘の天使を受け得べしと信じたりしかども、彼は之を請ふことをせざりき、猶太國民が彼を捕へて王となさんとするや、彼は遁れて其身を匿したりき、而して彼がメシヤとして自己を猶太國民に顯はすを以てよしと思惟せるや、彼は遂に王としてエルサレムに入りたりき、然れ共彼が預言の示す處に従ひ自己を顯はすや、最も政治的顯現より遠かりたる方

法を撰擇したりき。彼は神殿に於て商賣を爲せる者を逐出し、以て彼がメシヤとしての職務を如何に理解したりしやを示したりき。彼が神殿を潔むることに於て攻撃したりしものは國家の權威に非ずして、自ら權威を有せりと想像したりし輩なりき。何の國に於ても公認せられたる權威と共に公認せられざる權威あり、或は寧ろ二個の公認せられざる權威ありといふべし。即ち政治的教會及び政治的黨派是也。政治的教會の得んとする所のものは統治權也。人の心、身体、良心及び財産を統治せんとする事是也。政治的黨派の求めんとする所のものも亦之と同じ。而して此等の黨派の首長が人民の先導者となるや其暴虐專制君主よりも更に甚し。耶蘇の日に於けるパレスティンも亦此例に洩れざりき。祭司とパリサイの徒は人民を壓抑して之を奴隸視し、而して其靈魂を殺せり。耶蘇は爰に於て此不當の權威より國民を救はんと努力したり。彼は常に倦まずして之を攻撃し、彼等の殘忍なる性質と其偽善とを暴露

して彼等が罰せらるべき日の近づける事を宣言したりき。彼は彼等の權威を全く無視せざりき。故に云く、『往きて己を祭司に示せ』と。彼は又彼等が神の律法を教ふる限り其權威を承認したりき。故に云く、『凡て彼等が爾曹に言ふ處を守りて行ふべし』と。然れ共彼は彼等に向て吾人が馬太傳廿三章に於て讀むが如き恐るべき言を告げたり。云く、『嗚呼禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹は白く塗りたる墓に似たり。外は美はしく見ゆれども内は骸骨と諸の汚穢にて充てり』と。彼はヘロデ王に就てさへも實に此の如く云へり。云く、『往きて彼の狐に告げよ』と。彼は此の如く一方に於て不當の權威を輕蔑したりしかども、彼が眞實の權威を有するものに對する態度は甚だ之と異なりき。彼は彼等が眞實の權威を有すべく、又何人も此權威には服従すべきことを認め、彼亦自ら彼等の權威を遁れんことを求めざりき。吾人は彼が與へたる誓に關する命令を以て有司の前に於てなすべき誓を禁じたるもの也と思惟す

べからず。此命令の眞意はウエルハウセンの云へりし如く唯斟酌して初めて領解し得べきもの也。然れ共吾人は亦耶蘇が權威に對する地位を過重す可らず。世人屢々耶蘇が「カイザルの物はカイザルに歸し、又神の物は神に歸すべし」と云ひ玉へる言に依りて、彼が權威に對する地位を定めんとするものあり。然れ共此言は屢々誤解せられたり。若し耶蘇は之に依て神とカイザルとは兩々相對し、而して内實に於ては相一致せる二個の權力也との事を云はんとしたる也と思惟するものあらば是れ彼の眞意を誤解せるもの也。耶蘇は決して斯る觀念を有せず。否彼は之に反して此二個の權力は相互に離別し隔絶せるものなる事を云へる也。神とカイザルとは三個の全く相異なる領分の主宰也。耶蘇は此相違を明にし、此兩者の間に衝突のあり得可らざるを示し、以て當時困難の問題を解釋したりし也。デナリは此世の通貨にして其面にカイザルの肖像を印せり、去らば之をカイザルに歸さざる可らず。然れ共人の

靈魂と之に屬する凡ての力はカイザルと何の關係なし、當然神に屬すべきものたる也。換言すれば最も重要なるは此二箇の範圍を混交せざる事也。然らば則ち耶蘇が喜んで羅馬政府に租税を拂ひ玉ひし事甚明也。但し耶蘇は自ら國家の權威を尊敬し、又其尊敬せられんことを希望し玉ひしかども、彼が之に對して有したりし意見少くとも彼が之に就て云ひ玉へるものは中立の性質を有したりし事實は吾人の注目すべき處也。

耶蘇が國家の權威に關し言ひ玉へる言にして、吾人が以上論せるもの、如く屢々引用せられざれ共、更に深く彼の思想を顯はせるものあり。吾人をして少しく之を考察せしめ、馬可傳十章四十二節に云く、「耶蘇彼等(弟子等)を呼びて云ひけるは異邦人の君と見ゆる者は其民を治め又大なる者どもは彼等の上に權を執る、是れ爾曹が知る所也、去れ、爾曹の中にては然す可らず、爾曹の中大ならんと思ふものは爾曹に役は

る、者とあらん、又爾曹の中首たらんと思ふものは凡の人の僕とならん』と此言の中先づ注目すべきは耶蘇が通常の評價を顛倒せる事也。即ち彼の言に従へば大ならんとし、首たらんとするは役使はるゝ也。故に彼の弟子たる者は人を治んとすることなく、各自ら奴隸とならざる可らざる也。次に注目すべきは耶蘇が當時の權威に對して有したりし意見也。蓋し當時の權威なるものは腕力の上に立てり、是れ耶蘇が之を道徳の範圍以外に置きたる所以にして、此兩者は全く相反せり。故に云く、『異邦の君と見ゆる者は其民を治め、又大なるものどもは彼等の上に權を執る』と、耶蘇は其弟子に向て此の如くなる可らざるを教へ玉へり。腕力を基礎とせる律法は素より道徳的價值を有せず、然れ共耶蘇は彼等に向て之に服従するを要せずと云ひ玉ひしには非ず、唯其實際の價值に従て之を評價し、彼等は他の主義に従て自ら行ふべきを示し玉へる也。他の主義とは力に依て人を服従せしむるに非ず、自ら人に役事せら

るゝ是也。

第二の問題は福音と廣く律法と稱するものとの關係にして、此處にも亦二箇の相反せる議論あり、其一は律法と精神界とは全く相反せるものにして、教會が律法を造り之を發達せしめんとするが如きは福音の性質に全く相反せるもの也と論せるもの也。此説は現時ライプシツクの教授ツムの主張せる所也。氏は基督教會の初代に於ける發達を叙して、教會が律法を設くるに至りし時は即ち第二の墮落に陥りたる時也と論じたり。然れ共氏は律法を全く非難せるには非ず、其範圍内に於ては之を承認せる也。然るにトルストイは福音の名に依りて全く律法を排斥せり。伯の説に従へば福音の精神は人は其權利を主張すべからず、國家の權威と雖も惡に抵抗すべからずと云ふに在り、故に權威と律法とは遂に廢絶すべきもの也。トルストイに反せるものは云く、福音は律法を守護し、純化し、而して之を神聖ならしむるもの也。以上は即ち此

問題に關し二箇の相反對せる議論の要點也。

後説に關しては多言を要せず福音は當時律法たるものを悉く守護し、純化すと云ふは是れ福音を侮蔑するもの也之を其儘に放置し、寛假すといふ事と之を守護し純化すといふ事とは同一に非ず否福音は律法を寛假すといふは過言には非ざるか、トルストイの云ふ處果して誤れるか、是れ重大なる問題也。此至難の問題を決せんとせば少しく猶太の歴史に溯て之を研究せざる可らず。イスラエル國民は數百年間歴史上に苦しみ正義に向て叫びたりき吾人今日預言者の書を読み詩篇作者の祈を聞くも尙彼等の叫喚を聞くが如く、心竊に同情に堪へざるものあらん而かも彼等の叫は時移り時去りて尙聞れざりし也。吾人律法と其適用を論じ、耶蘇が之に對する態度を議するに當りては須らく其當時の事情を考察せざる可らず。吾人が今日有する律法なるものは幾分か基督教の主義に從て發達したるものなれば直ちに之を移して耶蘇の

律法に對する態度を論ず可らず。耶蘇は數百年間權利を求めて得ず、唯腕力を基礎とせる律法をのみ知れる國民の間に生れたもの也。此の如き國民が律法に關して失望の念を起せるは當然の結果也。彼等は以てらく正義は到底地上に於て成立す可らず、律法は遂に信任す可らずと。吾人は福音書中尙此の如き思想を有するを發見すべし。然れ共此感情に反し之を矯正するの思想あり、即ち耶蘇は神は必らず終に正義を以て報ゆべきことを確信し、神若し此世に於て之を爲し玉はずんば來世に於て必ず之を爲し玉ふべしとの事を教へ玉へり。此點に於て耶蘇の言に從へば、律法は即ち正しき應報にして、此意義に於て吾人は律法に異議を挾ひべき理由あることなし。否律法てふ思想は高尚にして且重要なる觀念也。應報は威嚴ある神の行爲也、而して此應報は如何なる點まで神の慈愛に依りて變せらるべきや、は今爰に論ずるの必要なし。去れば耶蘇が此意義に於て律法と其適用とを輕蔑したりとの議論は瞬

時も成立すべからず。吾人は各自己れの權利を得ざる可らず、否基督の弟子たるものは自ら裁判者となりて神の律法を行ふの日來るべき也。耶蘇が排斥したりしものは腕力を基礎とせる不正なる律法、暴虐、壓制に依りて國民に臨む不當なる權威のみ、彼は眞正の律法を信じ、又正義は必らず勝利を得べく、之が爲に力を要せざるもの也との事を確信したりし也。

(十六)

福音と律法との關係即ち秩序の問題 (下)

耶蘇の教訓中には彼の弟子たるものは其正當なる要求を棄て、其當然受くべき權利を放棄すべしとの事を命せるものあり、余は今唯其一例を示すべし、彼云く、「然れど我爾曹に告ぐ、惡に敵すること勿れ、人爾の右

の頬を批ば亦ほかの頬をもめぐらして之に向けよ、爾を誣へて裏衣を取らんとする者には外衣をも亦とらせよ」と、耶蘇の此要求は一見律法を蔑視し、人生の合法なる生活機關を破壊するもの、如し、故に此言は屢々是れ基督教の人生實際の生活と調和すべからざるを示すもの、に非ずんば、基督教國の基督の教へたる主義に背戾せるを示すもの也との批難を蒙りたり、然れ共此批難に答へんとせば左の事を考察せざるべからず、即ち(一)耶蘇は吾人の既に述べたるが如く深く神の正義を信じたり、故に彼は最後の勝利は壓抑者に非ずして、非壓抑者也との事を確信せり、(二)地上に於ける權利なるものは左迄貴きものに非ず、故に假令之を失ふとも左まで悲しむべきものに非ず、(三)此世に於ては不義不正の力強くして、弱者は假令其權利を主張するも到底之を得る能はず、(四)神は義也と雖も亦慈悲に富み、其日を義しき者にも義しからざる者にも均しく照し玉へば、耶蘇の弟子たるものも亦其敵を愛し、柔和を以

て之に處せざる可らず。是れ最も重要なる點也。是れ即ち此崇高なる教訓の基礎たる思想にして、亦之に依て此教訓の有する適當の範圍を見るべき也。抑も斯の如く超世間的要素を含有せる要求は遂に實行すべからざるものなるか。吾人は吾人の家族、朋友に向て斯の如く行ふべき事を勸告すべからざるか。若し各人唯自己の權利のみを主張し、更に之を放棄するを學ばずんば何れの家族、何れの社會か能く永存するを得べき。耶穌は其弟子を以て朋友の一團となし、弟子以外の人々を以て將來形造らるべき兄弟の一團也となせり。然れ共人或は問ふて曰く、吾人は凡ての場合に於て吾人の敵に對して權利を放棄すべきか。吾人は柔和の外如何なる武器をも取る可らざるか。トルストイの云へる如く、政府は罪人を罰すべからざるか。國民は假令無法の攻撃を受くるも國家の爲め戦ふべからざるか。余は肯て云ふ、耶穌が右に引用せる言を語り玉へる時に方りては決して斯の如き場合を想起し玉ひしことなし。

故に斯る解釋をなすは是れ彼の意を誤解するものなり。耶穌の心に有し玉ひしものは個人と愛とのみ。若し此愛なる心は自己の權利を主張し、正義を行ひ、罪惡を罰する事と兩立すること能はずといふものあらば是れ一種の偏見に支配せらるるもの也。此の如き人に向ては此等の言も無用なるべし。然れ共吾人は福音の要求の崇高なることは之が爲に減損せるものに非ざるを示さん。が爲に左の一言を附加せざる可らず。即ち耶穌の弟子たるものは其權利の主張を廢棄するものならざる可らず。而して又相互に兄弟たるの國民を造くるが爲に共働せざる可らず。其國民とは即ち力に依らず、自ら喜んで善に服従するの精神に依て正義の行はるる處、律法的制裁に依らず、愛の精神に依て結合せる處のもの。是也。耶穌が此要求を爲すに方りては當時の状況を其心に留めたるに非ず。況や更に複雑せる後代の状況ねや。彼が心の中に有したりしものは唯一、即ち各人の神の王國に對する關係是也。何となれば人は

價貴き眞球を買はん爲に其有てる凡の物を賣らざる可らず此の如く人は其最高なる關係を有せん爲には地上の權利を放棄せざる可らざる也而して耶蘇は此使命と共に人類の中に律法に依らずして愛に依りて結合し柔和に依りて敵に勝つべき一致共同の成立し得べき希望を與へたり是れ實に高貴にして光榮ある理想にして吾人が吾人の宗教の基礎より得たるもの也而して此理想は常に吾人の歴史的發達の目的として吾人の眼前に標榜すべき所のもの也人類は果して此目的に達し得べきか如何誰れかよく之を語り得ん然れ共吾人は之に近接し得べく又近接せざる可らず今日之を二三年前に比するに此傾向に向ひつゝあるを覺ゆ細密にして且預言的認識を有する吾人は又愛と平和の王國を以て空想となさざる也然れ共之が爲め今日吾人の中には困難なる疑問に苦めるものあり見よ吾人の中には其權利を得んとして争ひつゝあるものあるに非ずや

彼等は寧ろ其權利を擴張し増加せんとして争ひつゝある也是れ果して基督教の精神に適へるものなるか福音は此の如き努力を禁せざるか福音は吾人に告げて吾人の有する權利を放棄すべしと云ふも之を得んと試みよと云はざるに非ずや然らば吾人は基督教徒として夫の勞働者に向ひ其權利を主張するを止め唯忍耐を以て服従すべしとの事を勧告すべきか

此問題は亦基督教攻撃の形狀に於て顯はさるゝことあり社會的傾向を有する熱心の政治家にして喜んで耶蘇基督の指導を受けんとする所のものも尙謂えらく此事に於て福音は彼等を顧みざるもの也彼等は云く福音は彼等が明白なる良心に依りて正當也と信する熱望をも抑制せんとするもの也全然柔和と服従を要求するが爲に何人をも戦ふ能はざらしむるもの也斯の如くして福音は凡て人の實力を麻痺せしむるものなりと而して之れをいふもの或は痛恨よりし或ひは滿

足よりす。其の満足よりするものは云く、福音は健全なるもの強きもの、爲めにあるに非ず、病めるもの弱きもの、爲に在るもの也。而して福音は生活、殊に近時の生活なるものは各自其の權利を得んが爲めの努力也。どの事實を知らず、又知らんことを欲せざるもの也。吾人は果して如何に答ふべきか。

余の説は是也。此等の説は福音の何物たるを知らず、之を以て妄りに地上の事物と關係せしめんとするもの、説也。抑も福音なるものは人の心中に訴ふるものにして、健全なるも病めるも、幸福あるも不幸なるも、其有するものを保持して靜に地上の生活を送らんとする靈的人物を相手とするもの也。『我國は此世のものに非ず』福音の建設せんとするものは地上の王國に非ざる也。而して此等の言は唯夫の法王が建設せんとし、統治せんとする政治的神政体を排斥するのみならず、尙廣濶なる意義を有す。即ち消極的には宗教の直接に此世の事務に干渉するを禁じ、

積極的には吾人に告げて云ふ、爾は何人たるも、爾の地位は如何なるも、爾は自主なるも、奴隸なるも、戦ひつゝあるも、休息しつゝあるも、人生に於ける爾の事業は常に同じ、爾の犯すべからざる關係と思想は唯一にして此前には凡てのもの皆なきに均し、其一とは即ち神の子たる事、神の國の民たる事、及び愛を行ふべしとの事是也。爾が此世に於て如何に生活するか、如何に隣人の爲に盡すかは爾自ら善しと思ふ所に從てなすべき也。是れ即ち使徒保羅が福音の意義を解説せるものにして、余は彼が之を誤解せりと信ずる能はず。去らば吾人をして戦はしめよ、争はしめよ、弱者の枉屈を伸べしめよ、吾人の明白なる良心の命する處に從ひ、吾人が人の爲に最良也と思考し得る處に從ひ、世の状態を改良し整理せしめよ、然れ共吾人をして福音より直接の補助を望ましむる勿れ、吾人自らの爲に利己的要求を爲さしむる勿れ、世は其慾と共に過ぎ去るのみに非ず、亦其律法、規律、財貨と共に過ぎ去るものなることを忘

れしむる勿れ吾人をして再言せしめよ、福音は唯一の目的、一の觀念を知るのみ、而して之を放擲せざらん事を吾人に要求する也、吾人は常に吾人と神との關係及び愛の思想を高く吾人の前に標榜せざる可らず、福音は世間的發達に關する凡ての問題に超出せるものにして、物質的事物に關係するものに非ず、唯人の靈魂に關係するもの也。

(十七)

福音と工作との關係即ち文化の問題

耶穌の教訓は組織的の事業、即ち人の職業に對して甚だ冷淡にして、技藝及び學問の如き高尚なる事業を重ずるの形跡なしとは古來屢々世人の非難したる處にして、殊に近時に在ては此非難の聲甚だ高し、彼等は云ふ、耶穌は曾て人に勞作すべきことを勧め、又進歩の事業に着手す

べしとの事を勧めたることなし、吾人は何處にも彼が勸勞を教へたるの言を發見すること能はず、技藝、學問の如き事業は蓋し彼の夢想せざりし所ならん、デ、ビツト、フリードリッヒ、ストラウスは其最後の著書「古き信仰と新なる信仰」に於て特に激烈なる言語を以て此感情を表明せり、彼れ謂えらく、福音は文明の進歩に同情を有せず、故に陳腐にして無用のものなりと、彼は實に之を以て福音の根本的大欠點也とあせり、然れ共是獨りストラウスのみならず、敬虔學派は其久しき以前に於て既に之と同一の感情を表白したりき、而して彼等は其慣用の手段に従て此困難を解説せんと試みたりき、即ち彼等は先づ云く、耶穌は其職業の何たるに關せず、萬人の直接の模範たるに適せざる可らず、彼は如何なる地位にも自己を置くことを得たりしならざる可らずと、彼等は耶穌の實に此の如くなりし事は、忽卒に彼の傳記を讀むもの、發見する能はざる事實ありとの事を承認せりと雖も、彼等は謂はらく、若し綿密

に之を研究するときは耶蘇は實に最良の磚工、最良の總工、最良の判官、最良の學者にして彼は何事に關しても最良の智識と領解とを有したりし也。彼等は耶蘇の宣へる事を曲解して彼等が云はんとしたりし所のものを云ひ玉へるが如くなしたりき。彼等の所作は兒戯に類す。雖も此問題は又重要なるを免れず。彼等は謂えらく、彼等の良心と職業は彼等をして必らず或勤勞と或事業をなさしむる也。彼等は自ら僭侶たるの要なきを信せしかども、十分なる意義に於て耶穌に模倣せんと勤めたりき。彼等は即ち耶蘇は必らず彼等と同地位に立ち玉ひたりしならざる可らず。彼の立ちたりし地平線は彼等の立てる地平線と同様ならざる可らずとの事を信じたりし也。

是れ即ち吾人が前節に於て論じたりしと同一の誤謬に陥れるもの也。蓋し福音を以て地上の事務に直接の關係を有するもの也となし、人は如何にして其業務をあすべきやを教ふるは福音の務也となすは古來より常に起る所の誤謬也。人は高尚なる事業に於ても其自由と責任とを遁れ、法律に服従せんとするの傾向を有するものにして、以上の議論は畢竟此傾向の顯はれたるものに外ならず。假令苛酷なるものにてても一定の權威に服従するは自己の自由に從て行ふよりも平易也。然れ共そは兎に角、吾人の疑問は、福音が人生の實務に對して表する同情足らず、學問、技藝及び文明の點に於て人類に觸接するとなきは果して其大欠點なるべきや如何との事は是れ也。

余は先づ第一に之に答へて云ふべし。若し福音にして此欠點なかりしとせば其得る所果して如何。今假りに福音は凡て此等の事に直接の關係を有したりしとせよ。豈此等の事と混亂せざらんや。少くとも此等の事と混亂するが如く見えざらんや。夫れ勤勞、技藝、學問及び文明の進歩なるものは抽象的に存在するものに非ずして、其時代の特殊の狀態の下に存在するもの也。故に福音が是等のものと直接に關係すべくんば

是等のものと結合せざる可らず然れ共社會の狀態は常に變化して止まざる也見よ今日の羅馬教會なるものは特殊なる文明と結合せるが爲め大なる困難を有するに非ずや即ち羅馬教會は中世に在りて當時の文明進歩の諸問題に關與し之に形狀を與へ規則を附したり然れども其結果教會は不知不識當時の智識格言及び利益と同化せられ今日に至りても尙其哲學經濟換言すれば中世の文明と堅く結合して離すべからざるに至れり之に反して福音は唯宗教の大柱を持ち而して音調をして其響くに任せたり之れが爲め福音の人類に與へたる功績夫れ幾何ぞや

第二、勤勞及び文明の進歩は疑もなく貴重なるものにして吾人が之が爲に盡瘁せざる可らざること云ふまでもなし然れ共此等のものは最も高尚なる理想を包括するものに非ず又真正なる安心を吾人の靈魂に與る者にも非ず工作は吾人に快樂を與ふべしと雖も是れ唯事局の

一方面のみ噴々として工作の與ふる快樂を唱ふるものは自ら工作の勞を取るものに非ず致々として常に工作に従事するものは之を稱讚するに躊躇するものなるは吾人の常に見る所也工作に關し世人の語る所のものは多くは是れ僞善的譚話のみ眞によく勞働に従事するものは詩人の

頭と手と足とは工作のなしたらん事を樂む

と云へりし如く常に晩景の近づくかん事を待ち望むなり

而して又此勤勞の結果如何を考へ見よ吾人は其業を成し了るとき再び之を爲さんことを欲し而して其不完全と欠點とは吾人の良心を苦むる也否吾人は生きさんが爲に勞働せず他を愛して自ら喜ばんが爲に働く也フアウストの云へるは眞也勞働のみの勞働は吾人の嫌惡する所のものにして吾人は生ける水流を望み又其水流の源を望む也人は自から生ける水流を望む

嗚呼人は生ける水源を求むる也。

勞働は貴重なる安全辨にして、大なる罪惡を犯すを防ぐ爲に要用なれ共、勞働其ものは純善なるものに非ず、故に吾人は之を以て吾人の理想中に包括すること能はず。文明の進歩なるものも亦之に同じ。文明の進歩は素より吾人の歡迎すべきものなれ共、吾人が今日喜ぶ進歩なるものは明日に至り唯に器械的となりて何の樂をも吾人に與ふるとなるべし。濃厚なる感情を有するものは何人も皆感謝して文明の寄與する賜を受くべしと雖も、彼等は又之が爲に其内心の状態少しも變化せざる事をも熟知する也。新なる者來りて、之が爲め困難を免るゝが如く感ずるは唯霎時のみにして、決して永續するものに非ず。人は年老ひて人生の眞味を了解するに従ひ、外界の進歩及び文明の發達なるものは決して吾人に進歩を與ふるものに非ざるを發見すべし。否、吾人は尙存て在りし所に在るを感じ、吾人の先祖が嘗て求めたりし勢力の根源を

求めざるを得ざるを感すべし。然り吾人は神の國、永遠の國、愛の國の民とならん事を求め、而して遂に耶穌基督の語り玉へるものは即ち此神の國の事のみなりし事を了解し、之を感謝するに至るべし。

第三、耶穌は最も明白に其使命の進撃的なるを確信したり。彼云く、「我れ火を地に投入れん爲に來れり、我何をか望む、已に此火の燃えたらんこと也」と。彼は新なる人類を造らん爲に審判の火、愛の力を攪起せんとしたり。彼れは當時の状態に應じ、簡單なる方法に依りて此愛の力に就き語り玉ひたり。然れ共彼の目的とせる所は人心の變化に在りし事明也。終りは來れり、去れ共、藁々たる枝葉の繁茂せる樹木は此終りの時に微小なる種子より發生したり。且彼は神の智識を世に顯はしたり。而して彼は此智識なるものは年少者を成熟せしめ、弱者を強からしめ、彼等をして神の勇卒たらしむるもの也。この事を確信したり。神の智識は即ち不毛の荒野を豊饒ならしめ、生ける水流を湧出せしむる水

源也。此意義に於て彼は之を以て教化の條件として最高尙にして且必要なる善也となしたり。吾人も亦云ふべし、此智識は凡てのもの、進歩、發達の必須なる條件也。彼は又審判のみならず、義愛及び平和の王國は天より來れりと雖も、世の爲め來れるもの也との事を信じたり。此王國は何時來るべきや、之を知るは唯父のみにして、彼自ら之を知らず。然れ共彼は其如何にして來り、如何にして擴張すべきやを知れり。彼は地上に於ける神の葡萄園と神が此葡萄園に招き玉へる勞動者とを見たり。神の召に應じて神の葡萄園に來れる者は福なる哉。彼等は再び空しく市場に行立せず、來りて葡萄園に働き、其報賞を受くる也。又試に銀貨を其僕に與へたりとの喩話を見よ、與へられたる僕は之を服紗に藏すべからず、往きて之をはたらかせざる可らざる也。此の如く吾人日々之の勤勞、工作、進歩、發達は永遠の光明に依り、神と人との爲になさる可らざる也。

以上論ずる所を概括すれば即ち左の如し、福音に對して吾人が初めに掲げたる批難は果して正當なる批難なりや、吾人は實に福音が文明の進歩に關與したりしことを希望すべき也。余は思ふに吾人は福音より學ばんことを求むべし、決して其欠點を見出さんとする可らず。福音は人類の成就すべき真正の事業を吾人に教ふる也、吾人は決して之に文明の事業と干與すべきことを求む可らず。或る近代の歴史家の云へる如く、基督の肖像は道德的修養唯一の基礎にして國民の道德的修養の増減は其光明を透徹せしむる効果の如何に存する也。

(十八)

福音と神の子との關係即ち基督論 (二)

今や吾人は基督論の問題に到着せり。基督は基督教の中心にして、基督

論は基督教神學の中心也。故に基督に關する議論は古來神學上最も重要な地位を占めたり、而して基督に關する研究の盛なる今日に在りては基督論程吾人に興味を興ふるものなかるべし。抑も著者は此點に關し如何なる議論を保持せりや、吾人は今之を左に紹介すべしと雖も讀者が慎重なる注意と健全なる判斷とを以て之を讀まれん事は吾人の豫じめ希望する所也。

著者の此處に論せんとしたるものは基督の基督論にして教會の基督論に非ず。著者の議論に従へば人と基督の間に基督の性格に關する教理を説くるは誤謬也。彼が福音書に於て吾人に教へたりしものを外にして別に教理を立つるは是れ基督の教訓を疎外するもの也。基督は其訓練を守るべしといへる事の中に含有せられたるものを外にして別に彼の性格に就て信ずることを求め玉はざりし也。是れ果して然るか、吾人は先づ著者の云ふ所を聞くべし。

著者云く、今や吾人は前に論せる諸問題とは甚だ異なる問題に到着したり。即ち耶穌は福音を宣傳するに方り、之に對して如何なる地位を取ら玉ひしや、彼は如何に己の承認せらるゝを望み玉ひしやとの事は也。吾人は未だ彼の弟子が如何に彼を承認したりしや、彼に關して如何に考へ、如何なる説を有したりしやを論せんとするものに非ず、吾人の今論せんとする所のものは彼は彼自らに關し如何なる證明を吾人に與へたりしやとの事は也。然れ共此問題は基督教會の初代より今日に至るまで爭論の燒點となりし所のものにして、之が爲め幾多の人は教會より放逐せられ、獄に繋がれ、殺されたり。是れ實に驚くべき事也。而かも人は此問題を以て恐るべき武器となし、人は此問題の爲に怯懦となりたり。而して此の狀態は今日に至るまで繼續し、基督論は福音書中唯一の問題なるかの如く思考せられ、從て之に對する感溺依然として尙盛也。誰れか此の如き歴史を有し、宗派的疑問となれる此問題を論ずるの

困難なるに驚かざらん。然れ共公平に福音書を読むものは耶穌自ら爲し玉べる證明の決して解釋し得べからざるものに非ざるを發見すべし。素より吾人の心に了解し難きものあるべし。此の如きものは唯之を其儘になし置くべきのみ。而して吾人は唯耶穌の語らんとし玉ひし眞意を探りて之を會得せんと務むべき也。

吾人は耶穌が自己に關する證明の如何を研究せんとするに先ち、二個の事實を明にせざる可らず。第一は彼は其訓誡を守るべしと云へる事の外、彼の性格を信じ、之に固着すべしといふが如き希望を有したりし事はれなしとの事は也。第四福音書が耶穌の人格を論ずるは他の福音書に優れりと雖も、同書中に於ける耶穌の思想も、爾曹もし我を愛せば我戒を守れ」といふに外ならず。蓋し耶穌は必ず彼が使命の内容如何を顧みず、唯安らに彼を尊崇し、若くは彼に信頼せんとしたりしものあるを發見したりしなるべし。故に彼は此等の徒を戒めて云く、「我を呼びて

主よ主よといふもの盡く天國に入るに非ず、唯之に入る者は我天に在す父の旨に遵ふ者のみ也」と。然らば則ち福音を離れて、耶穌の性格に關し、教理を立てんとするは全く耶穌の思想以外に在る者なるを知るべし。第二は耶穌が天地の主を以て其神とし、父とし、又彼より大なる者とす。唯獨り善なる者となし玉ひし事は也。彼は其有すもの及び其爲さんとする所のものは悉く此父より來れりとの事を確認せり。彼は此父に祈り又自ら父の聖旨に従ひ、其聖旨の在る所を諒し、之を成就せんと努めたり。目的、力、理解力、成果及び剛毅は凡て父より來らざる可らず。是即ち福音書の言ふ所のものにして吾人は之を曲解すること能はず。此二箇の事實は耶穌が自己に關してなしたる證明の範圍を劃するもの也。此等の事實が耶穌の宣へる事に關して積極的の報道を吾人に與ふるものに非ざるは明也。然れ共吾人若し仔細に耶穌が自己を呼ばんとし玉ひし神の子及びメツシヤ(ダビデ)の子、若くは人の子なる

二個の稱號を吟味せば耶穌が之に依て何を云はんとし玉ひしやを領解し得べき也。

耶穌が自己を以て神の子と云ひ玉ひし最初の意味は或はメツシヤ也との事を云ひ顯はさんどしたりしに過ぎざりしなるべしと雖も彼は又メツシヤ的思想以外の意義を之に興へ玉ひたれば此稱號は寧ろ吾人今日の思想に近似せりといふべし蓋し單にメツシヤとして自己を呼ぶは一見吾人の思想と遠遠なるものあり吾人は之が説明を聞くに非ざれば否吾人自ら猶太人たるに非ざれば此稱號の如何なる意義を有し如何なる資格如何なる性質を有するやを理解すること能はざる也吾人は歴史的研究に依り其意義を考駁して後初めて既に猶太の政治的生命と共に滅亡せる外皮以外に此語は如何なる意義を有するやを問ひ得べき也。

吾人をして先づ「神の子」なる稱號に就て考へしめよ耶穌は何が故に又如何なる意義に於て自ら此稱號を用ゐ玉ひしか彼は其説話の一節に於て殊に之を明白ならしめ玉ひり此語は之を約翰傳に見ずして之を馬太傳に見るべし即ち云く「父の外に子を識るものなく又子及び子の顯はす處の者の外に父を識る者なし」と神の子たる資格を造くるものは即ち神を識る事也耶穌が天地を支配せる聖者を父とし己れの父として知るに至りしは此智識也故に彼が「神の子」なりとの自覺を有するに至りしは神を父とし己れの父として知りたる實際的成果に外ならず故に「子」なる稱號は正當に之を解すれば神の智識に外ならざる也去れ共爰に二箇の考察すべき事柄あり耶穌は自ら曾て何人も知りしことなき道に於て神を識りし事を確認し又此智識を其言行に依りて人に傳ふるは彼の使命也との事を知り玉ひし事是也此自覺に依りて彼は自ら神に立てられ神に呼ばれて子となりたることを知り神の唯一の子なることを知り而して神に向ひ「我が神我が父」と呼び何人も此の

如く呼ぶこと能はざるを示し玉へり。彼は如何にして神に對し斯る異常の關係を有せるを自覺せりや、彼は如何にして其權威を自覺し、又此權威を以て行ふべき使命と責任とを自覺するに至りしや、是れ彼の秘義にして如何なる心理學も決して之を推測すべからず。彼が天父に向ひ「爾は世の基を置かざりし前より我を愛し玉へり」と云へる信任は疑もなく彼が自ら語り玉へる確信の直接の反照也。凡ての研究は之より以外に一歩も進むこと能はず。吾人は彼が初めて自らの神の子たるを知りしは何時なりしや、彼は直に全く自己を以て此思想と同化したりしや、若くは此思想を有するに至る迄には斷へず心中に疑問を有したりしや、さへも語ること能はざる也。彼と同一の經驗を有するものに非ざれば何人も此秘義を領解すること能はず。預言者なるものは或は此秘義を解明せんと試むることあらん。去れ共吾人は謙遜と自ら知るべし。この事を宣傳へたる此耶穌は自己を、自己のみを神の唯一の子と稱

したりしこの事實を以て満足せざる可らず。彼は實に自ら父を知れりとの事と、彼は此智識を万民に傳ふべきものたる事と、彼は此の如くして神の業を有しつゝ、ありこの事を確認し玉ひたりき。是れ實に神の業の中に於て最大なるものにして、又天地万有創造の目的也。此業は彼に與へられ、彼は神の力に依りて之をなし玉へり。彼が「父は万物を我に與へ玉へり」と云ひ玉へるは即ち此力を感じ、勝利の希望を有するより出でたるもの也。神の使命を有せりとの確信を以て、自ら好むも好まざるも此使命を成就せざる可らずとして世に出でたるもの古來今日に至るまで甚だ多し。然れ共彼等の使命は常に不完全なるを免れざりき。或は政治的分子を混交せるが爲め、或は其當時の境遇に制せらるゝが爲め、或は此點に於て、或は彼點に於て欠陥あるを免れざりき。而して預言者彼自らも亦其使命の模範たるに堪へざるもの一再にして止まらざりき。然れ共耶穌に於ては然らず、其携へ來れる使命は最も深遠にして、

最も廣潤也。人類の根本に達し而して又天下萬民に及ぶ。是れ實に父なる神より出でたる使命也。此使命には欠陥あることなし、其眞髓は直に之を包める外皮を脱却せり。此使命は古び衰ふることなし、今日に至るも尙生命と力とを以て勝利を得つゝある也。此使命を成就せる彼は何人にも其地位を奪はるゝことなく、今日尙人生に意義と目的とを與へつゝある也。是れ即ち神の子たる彼也。

(十九)

福音と神の子との關係即ち基督論 (二)

耶穌が自らに與へ玉ひし他の稱號は「メツシヤ」也。有名なる學者の中には耶穌が果して自らメツシヤと稱し玉ひしやを疑ふものあり、ウエルハウセンの如きは即ち是也。然れ共余は此疑に賛同すると能はず、否、余

は此疑を主張せんとせば勢ひ福音書記者の言ふ處を曲げざる可らずと思惟する也。耶穌が使用し玉ひし「人の子」なる語は之をメツシヤの意義に用ゐてのみ始めて了解せらるべし。他の事は暫く措て論せず。夫の基督がエルサレムに入り玉ひしといへる如き事端は若し彼が自ら約束のメツシヤ也と信じ、又此の如きものとして承認せられん事を希望し玉ひしとなすに非ずんば抹殺せらるべきのみ。且耶穌が自己の意識及び其使命に就て語り玉ひし事の如きも、若し之を以てメツシヤ的觀念より來りたりとなすに非ずんば了解すると能はざる也。且夫れ此説(耶穌は自らメツシヤ也と言ひ顯はしたるとなしとの説)を維持せんとして提供せられたる議論なるものは何れも薄弱にして、吾人は此等の説あるに拘はらず、耶穌は自らメツシヤと呼び玉ひしと確信せざるを得ざる也。

耶穌の時代に存在したりしメツシヤの觀念及びメツシヤ的觀念なる

ものは王及び預言者なる二個の相結合せる方面に依りて發達し來りたるものにして、之と全く相異りたる他の感化も亦與て力あり而して此觀念は神は人の見るべき形狀を以て自ら其民を治め玉ふべしと云へる古代人民の希望に依りて變化せられたり。メツシヤ的思想の重なる概念はイスラエル王國より取りたるものにして、即ちイスラエル王國滅亡の後之に附與せられたる理想的光華より取れるもの也。而してモーセ及び預言者等の遺事も亦此メツシヤ的觀念を形造くる一要素と爲りたり。吾人は今左に耶穌の時に至るまで此メツシヤ的希望は如何なる形狀を以て發達したりしや、耶穌は如何に之を變化したりしやを概論すべし。

耶穌の時代に當り猶太國民の間に行はれたりしメツシヤ的觀念は獨斷的教理にてはあらざりき、又最も嚴格に教訓せられたる律法的訓誡と關聯したるものにててもあらざりき。然れ共此思想は當時國民が將來に向て抱きたりし宗教的、政治的、希望の大切な一要素を有せるものなりき。但し此思想は其根本的觀念を除きては一定の形狀を取りしことなく、其所説一様ならざりき。古預言者等は神自ら世に下り、イスラエルの敵を滅し、義と平和と喜とを行ふ時來るべしとの希望を抱きたりき。然れ共彼等は又之と共に賢明にして力ある王、ダビデの家より出で、此光榮ある時を來らすべしとの事をも約束したりき。而して又彼等は、イスラエルの人は即ち諸國民の中より撰ばれたる神の子也との事を彼等に告げたりき。此三個の思想は猶太人をしてメツシヤ的觀念を造らしむるに大なる力を與へたり。而して彼等が光榮ある將來を待つ希望は凡ての希望を、(一)の木匡となりたりき。然れ共基督降生前二百年間此思想に加ふるに更に左の要素を以てしたりき。(二)歴史的境界の擴張は猶太人をして世界に於ける諸國民に向て更に大なる興味を有せしめ、又彼等に人類全般の觀念を與へ、メツシヤの働なるものは猶

太人のみに非ず、世界人類に及ぶもの也との事を教へたり。故に彼等は審判の日なるものは全世界に及ぶもの也とし、又メツシヤは世を審判のみに非ず、又之を統治するもの也となせり。(二)其初に方りては國民の道徳的純潔も光榮ある將來と共に思索せられざるに非ざりしかども、イスラエル國民の敵を亡滅すべしとの事は其最も重なる思想なり。然るに今や道徳的責任の念と、神を聖者として知るの智識は更に重要なるものとなり、メツシヤの來る時代には聖き民を要すべしとの事と、來るべき審判は必ず又イスラエル人民をも審判する所のものならざる可らずとの思想行はるゝに至れり。(三)個人的精神の盛なると共に神と個人との關係も亦著しく重要となれり。イスラエル人は個々として自ら其民の中に在りとの事を感じ、個々相集りてイスラエル國民を造るべしとの事を自覺するに至れり。斯くして神が個々に與ふべき真理を信する個人的信仰は、國民全体の舞理を信する政治的信仰と共に

發現し、各自の價値と責任を感ずるの念と結合せり。而して吾人は亦末世の希望と共に永遠の生命に對する希望と、永遠の刑罰に對する畏怖の情の、此時初めて萌し來りしを見る。而して此等内的發達の結果は個人的救拯に於ける興味と死後の蘇生を信する信仰を發現せしめたり。而して醒覺せる良心は國民の神を冒瀆し、罪の中に沈淪するを見、最早全國民に向て光榮ある將來を望む可らざることと、唯遺されたるもののみ救はるべしとの事を了解するに至れり。(四)將來に於ける希望は漸次過境的となり、超自然的、超世界的となれり。全く新なるもの天より世に降り、而して此新なる過程は古きものと分離するに至る。否此の如くして變化せらるべき地は最早結局目的に非ずして、絶對的幸福なるものなり。此幸福の在る所は即ち天也との觀念起るに至れり。(五)既に久しき以前より待ち望まれたるメツシヤの人格は此時に至り明白となり、メツシヤとは此世の王者にも非ず、イスラエル國民全体を指せるにも

非ず、又神を指せるにも非ずとの事明となれり。彼は人の中に人として顯はれ出づべけれ共メツシヤ的特質を有するに非ず、又彼は神と共に世の創始より存在したりしとせられ、彼は天より降り超人間的方法に依りて其事業を爲し玉ふべしと思惟せられたり、而して道徳的特質は彼の性質に於て最も大切なるものとなり、彼は凡ての誠を守り玉ふべき完全なる義人也と思考せられたり、唯是れのみ非ず、彼の功績に依りて万民皆其利益を享くべしとの思想さへ生ずるに至れり、然れ共以賽亞書第五十三章に指示せられたる受苦のメツシヤの思想には未だ到達せざりき。

然れ共以上述べたる思辨は何れも古き簡易なる思想に代はること能はざりき、人民の大多數が初めより取り來りたる愛國的、政治的解釋を斥くること能はざりき、神自ら王位に坐して其敵を滅ぼし、イストラエル王國を建設し、一人の王者を撰んで此事業を成就せしむべく、人は各々

無花果樹下、若くは葡萄園中に坐し、以て敵の頸を踏み、平和の果を享有すべしとはメツシヤに關する國民一般の思想にして、之よりも高尚なる觀念を有せるものも亦此思想を脱すること能はざりき、然れ共一部の人は疑もなく神の王國は之に適ふべき道徳的状態を假定し、而して唯義しき人にのみ來るべしとの事を感じたりき、或者は斯くの如くして此義は嚴正に律法を守ることに依りて得らるべく、彼等が之を得ん爲に顯はせる熱心も尙不十分也と思考し、或者は更に深く己れを知るの智識に依りて、彼等が熱心に求めたりし義なるものは唯神の手よりのみ來るものにして、罪の重荷より免れんとするには神の補助と恩寵と慈悲と勿かるべからざる事を漸く認むるに至れり。

斯くの如く基督の時代に在りては此一事に關し、一方には失望的感情あり、他方には之と全く相反せる説の行はるゝあり、凡そ何れの時代、何れの國に於ても宗教歴史上此の如くに相關係せる極端の反對行はれ

たる事例なかるべし。即ち或時には其眼界甚だ狭くして僅にエルサレムを圍繞せる丘陵の周圍に過ぎず、而して他の時に在ては全人類を包容せり。此に在ては凡てのもの悉く高原の上に置かれ、萬事精神的、道德的見地より觀察せられ、彼に在ては唯石の投げらるゝ範圍に置かれ、全景苑も唯國民の政治的勝利を以て終らざる可らざるかの如く見ゆ。一方に在ては神に信頼するの念強くして義人義の爲に争ひ、他方に在ては宗教的衝動狹隘なる愛國熱の爲に蔽息せられたり。メッシヤに關する觀念も亦其希望と同じく相反したりしならざる可らず。即ち人々の彼に關する思想なるものは常に變化しつゝありたり。例之彼が有すべき肉體の性質は如何どの問題は提起せられたり。彼の内的性質及び彼が神の召命を受けて爲すべき事業は種々に考察せられたり。而して道德的及び宗教的要素の盛なりし場合には人々は政治的、武勇の統治者なる觀念を棄て、之に代ふるに預言者の觀念を以てし

たりき。彼は神を吾人の許に近く携へ來るべし、彼は或方法に依りて正義を行ふべし、彼は苦痛の重荷より吾人を救ふべしとは即ち人々の彼に望みたる所なりき。福音書に記せるバプテスマ約翰の記事は即ち當時此形狀に於てメッシヤを待ち望める熱心なる人ありし事を明ならむむるもの也。少くとも此記事は斯る觀念を拒斥せざりし人の存在せるを示せるもの也。吾人は此記事より當時或人は約翰を以てメッシヤ也と思惟せしとの事を學ぶ也。駱駝の毛衣を着し、國民は墮落せり、審判は近けりと云へる事の外何等の使命をも携へ來らざりし悔改の平民的説教家を以てメッシヤ也となしたりしを見れば、メッシヤ的觀念が如何に其最初の思想より變化し來りしかを見るべき也。又福音書が更に進んで多くの人々は耶穌が權威を有するものゝ如く語り、且奇跡を行ひしが故に彼をメッシヤ也と信じたりしと云ふを見れば、メッシヤの觀念が如何に根本的に變化したりしやを見るべき也。彼等は此救拯

的動作を以て單に其使命の端緒となし、彼は間もなくして其假裝を脱ぎ棄て、天國を建設すべしと信じたりしは眞也、然れ共吾人が爰に言はんとする所は彼等は其出生と従前の生活を熟知し、而して天國は近ければ悔改めよとの事を言へ傳へたりし外何事もなさいしものを以て、古より彼等に約束せられたるもの也として歓迎するに躊躇せざりしとの事は也、吾人は耶穌が神の子也との自覺より、約束せられたるメッシヤ也との自覺に達したる心的發達を推測せざる可し、然れ共他の人々が當時メッシヤに關して抱きたりし觀念の漸次變化して全く異なる形狀に發達し、政治的觀念より精神的、宗教的に變じたりしを見るときは、此問題は最早全く孤立せるものに非ざるを知るべき也、パブラスの約翰及び十二使徒が耶穌を以てメッシヤ也となしたりし事、及び耶穌が彼が如き形狀を取りて來りたりしに拘はらず、彼等が之を否まさりしのみならず却て之を承認したりし事は、當時メッシヤ的觀念

の一定せざりし事を証するものにして、又以て耶穌が自ら斯の如き形狀を取り玉ひし所以の理を説明するものと云ふべし、力は弱に於て全くなれり、神の力と榮は地の力と榮とを要せざる處に在りとの事は、其身の貧賤なるに拘はらず自らメッシヤと呼べる彼の夙に知り玉へる所なりき、而して此事は彼を以て神の受膏者、イスラエルの主として承認したりしもの、均しく感じたりし所ならざる可らず。

(二十一)

福音と神の子との關係即ち基督論 (三)

耶穌は如何にして我はメッシヤ也との事を自覺するに至りしや、吾人之を説明すること能はず、然れ共此問題と關聯して吾人の立論し得るものあり、最も古き傳説に従へば耶穌がメッサムを受くるに當り實

驗し玉ひし内的經驗は其メッシヤ的自覺の根源なりし也斯の如き經
 驗は素より吾人の批評し得べきものに非ず況や之に反對するをや否
 彼が其公生涯を初むるに方りて既に確乎たる自覺を有し玉ひしは疑
 なきが如し福音書記者等は耶穌の公生涯を記するに方り先づ彼が惡
 魔の誘惑に逢ひ玉ひしどの事を以て初めり此記事は即ち耶穌が既に
 神の子たること神の民の爲に大切なる事業を神より委託せられたる
 者也どの事を自覺したりどの事と此自覺に依りて彼は誘惑に勝てり
 どの事を假定せる者也約翰が獄中より人を遣はして「來るべき者は爾
 なるが我等他に待つべきか」と問はしめたりし時耶穌が答へ玉ひし言
 は約翰をして必らず耶穌のメッシヤなる事を了解せしめたりし也然
 れ共耶穌は之と共に彼が了解したりしメッシヤの職務は如何なる者
 なりしやを約翰に示したりし也カイザリヤピリビに於て彼得が彼を
 以て彼等の待ち望みたりしメッシヤ也と告白せし時耶穌は喜で其云

へる所を確認したりき而して耶穌は後幾ならずパリサイの徒に問ふ
 て云く「爾曹キリストに就て如何に思ふや是れ誰の子なる乎」と而して
 彼は更に新なる疑問を以て此問答を終れり云く「然らばダビデ既に之
 を主と稱へたれば如何で其子ならんや」と最後に彼はエルサレムに入
 りて萬衆に顯はれ神殿を深めたり是れ彼がメッシヤ也との宣言と相
 適ふの行爲也此行爲は之に次ぐに荆棘の冠と十字架とを以てせり
 余は以上耶穌が其公生涯を初むるに方り既に自己に關する意識を有
 し明に其使命を了解したりしどの事を述べたり然れ共余は之に依りて
 耶穌は其生涯の行程に於て學ぶべきものを有せざりしといふには非
 ず彼は唯に困難を忍び神を信じて十字架を望むべきことを學ばざる可
 らざりしのみならず彼が神の子たりどの自覺は試煉に遭遇せざるを
 得ざりし也父が彼に委託し玉ひし事業の智識は勤勞と凡ての困難に
 逢ふて之に勝つに依るの外發達し能はざりし也彼が預言者等の語り

たりしものなりとの事を自ら悟りたりし時、彼が自己の有したりし使命の光明に照してアブラハムよりモーセに至るイスラエル國民の歴史を見たりし時、彼が約束せられたるメツシヤ也との確信を避くると能はざるに至りし時は、抑も彼に取りて如何なる時なりしぞや、彼は最早此確信を避くると能はざりき、而して吾人は彼が初めて此智識に達したりし時之を以て非常なる重荷也と感じたりしと信せざるを得ざる也、然れ共吾人は此點に於て約翰傳の記せる處は眞也と信する也、即ち其の記す處に従へば耶穌は屢々自己の證をなして「我れ己より言ふに非ず、我を遣はしし父我言ふべき事我語るべき事を命じ玉へる也」と云ひ、又「我れ獨あるに非ず、我を遣はしし父と共に在る也」と云へり。吾人は假令メツシヤを如何に了解するも、神の召命を受けたりと確信せるものが、猶太國民の宗教歴史中に絶對的承認を得るに至らば是れ甚だ必要なる假定也、メツシヤの觀念は自ら神の子にして、神の業を爲

しつゝありと確信せる人をして歴史中重要なる地位を有せしむる手段となれり、然れ共一たび此目的を達すれば其使命は之を以て終れる也、耶穌はメツシヤなりき、然れ共彼は又メツシヤにてはあらざりき、彼はメツシヤなる語の有し得るよりも多くの意味を之に附加したれば也、吾人は其觀念の奇なるに驚く事あるべし、然れ共吾人は亦其意義の幾分を了解し得べし、數百年間猶太國民の心魂を奪ひ、凡ての理想を其中に置きたりし此觀念は吾人の全く了解すると能はざるものには非ず、彼等はメツシヤの來る時期を以て黄金世界の來るものとなしたりき、而して此希望は若し之を道徳化すれば人生に於ける活潑なる運動の目標となり、歴史の宗教的見地に於て離す可らざる要素とならざる可らず、吾人が人格を有するメツシヤを望むと云ふは即ち歴史中世を教よ要素を爲すものは人もどの事實と、若し人類の一致なるもの出來得べくんば此人類は一人の主、一人の君を承認せざる可らずとの事實

を表明せるもの也。然れ共之を外にしてはメツシヤ的觀念に他の意義及び他の價值を附加すべきに非ざる也。

(廿一)

福音と神の子との關係即ち基督論 (四)

敬虔なる猶太人は耶蘇のメツシヤたるを承認すると共に、彼の使命と人格との間に密接なる關係あるを認めたり。即ち神はメツシヤに依りて其民に來れり、神の業をなし、其右に坐せるメツシヤは崇拜せらるべき權利を有せりとは彼等の信じたる處なりき。然れども耶蘇が自ら其福音に對して取りたる態度果して如何、此問題に對する答二個あり、一は消極的にして他は積極的也。福音の何物たるやは吾人が此書の初めに於て既に論じたる處にして、

此外福音あることなし、故に吾人は何物をも之に附加す可らず。即ち神と靈魂、靈魂と神、是れ福音の全体也。神は律法と預言の中に發見せらるべく、又實に發見せられたりとは耶蘇の心に會て疑感を有せざりし所也。『嗚呼人よ、彼は汝に善の何物なるやを示し玉へり、主は何を汝に求め玉ふや、義をなし、憐恤を愛し、謙遜りて汝の神と歩む是也。』彼は吾人の模範として神殿に立ちて其罪を悔いたる税吏、レプタニを投げ入れたる娼婦及び父に歸りたる放蕩息子を示し玉へり。而して此等のものは何れも基督論に就て何事をも知らざりし也。而かも税吏は其謙遜るに依りて義とせられたり。此等の事實は其最も重要なる方面に於て耶蘇の教訓の莊嚴と單純とを傷くるに非ざるよりは他に之を了解すべからず。耶蘇の教訓は準備的に了解せざる可らず。即ち彼の死と蘇生との後異なりたる意味に於て解釋せざるべからず。否、或部分は何の意味も本體ものとして放擲せざる可らず。或人々の主張する所なれ共、是

れ實に大膽なる假定也といふべし。耶穌の教訓は教會の思考せんと欲するよりも單純也。單純なるが故に嚴格にして、萬人の承認せざるべからざるもの也。何人も基督論を爲し能はざるが故に、耶穌の教訓は我が爲に與へられたるものに非ずとの遁辭を以て之を遁れ得べきものに非ず。耶穌は大問題に人々の注意を向け玉へり、神の恩恵と慈愛とを彼等に約束し玉へり、神に事ふるか財に事ふるか、永遠の生命を有すべきか、地の生活に満足すべきか、靈魂を重するか、肉体を重するか、謙遜なるか、自ら義とするか、他人を愛するか、私慾を求むるか、眞理をいふか、虚偽を語るか、自ら之を定めざる可らずと彼等に求め玉へり。此等問題の有する範圍は凡てを含蓄す。各人は神の父なる事と其恩寵との福音に耳を傾け、神の子となりて、永遠の生命を得んか抑も亦此世の子となりて、滅ぶるものならんか、自ら之を定めざる可らず。耶穌の宣傳する所に於れば福音は唯父と關係すべきものにして、子と關係すべきものに非

ず。是れ決して逆説に非ず、又唯理説にもあらず。福音書記者等が吾人に示せる事實を單純に表明せるものたるに過ぎざる也。然れ共何人も未だ曾て耶穌の如くに父を知りしものなし。彼は此父を知るの智識に人を導き、多くの人には之に依て能く父に事ふる也。彼の人を父に導くや唯に其言を以てするのみに非ず、又其行、其性格及び其苦難を以てする也。彼が『凡て勞れたる者又重を負へる者は我に來れ、我爾曹を休ません』と云ひ、又『人の子の來るも人を役ふ爲には非ず、反て人に役はれ又多くの人に代はりて生命を與へ、其贖とならん爲也』といへるは即ち此意義に於て也。彼は神を知るところに依りて、小さなものは此の世の大なる者よりも大なるものとなる新時期の彼に依りて來るべきを知れり。彼は重を負ふて疲れたる幾千万の人々が彼に依りて父を知り、永遠の生命を得べきことを知れり。又彼は善き種を蒔く種蒔く人などの事を知れり。此等の事の中には獨斷的教理を含蓄するとなし、況や福音

の意義を變改し、若しくは強制的に吾人の信仰を要求せんとするが如きことをや。此等は耶穌が既に起りつゝありたるものとして、又將來に於て起るべきものとして考察したりし事實を表明せるものに外ならず。耶穌が其使命を成就するの困難を感じ、苦悶奮闘せる時に方り、彼に依りて醫者は見、跛者は歩み、聾者は聞き、貧者は福音を聞かせらるゝを見て、彼は天の父が彼に與へたりし榮光を理解し初めき。而して彼は、今彼の身に苦めるものは死によりて其頂點に達せる彼の生活に依りて萬世に効果を及ぼすべき至重至大なる事實として存在すべしとの事を了解したりき。即ち彼は父に至るべき道也。彼は父に依りて立てられたるもの、如く又審判者なる也。

耶穌が福音と關係を有せりと云ふは、彼が唯一個の因數也といふに非ず。彼は其人格的現實也、其力也、火は唯火に依りてのみ燃ふべし、人の生命は唯人の力に依りてのみ生くべし、吾人をして凡ての獨斷的詭辨を避けしめよ、若し之に依りて破門の命下らば其下るに任せよ。福音は何處にも神の慈恵は耶穌の使命に限れりとの事を示さず。然れ共歴史は明かに耶穌は疲れたる者、重を負へる者を神の許に導き、又人類を新なる標準に上ぐる唯一の人也との事を示せり。而して彼の教訓は今日に至るも尙或は人を幸福に導き、或は人を審判に導く試金石たる也。

「我は神の子也」との言は耶穌自ら福音書に挿入せるものに非ず。此言を他の言と兩々相併行せしむるは是れ福音を増加する也。然れ共福音を承認し、且之を吾人に與へたる耶穌を理解するものは、何人も神が地に顯はれ得べき純粹の形狀に於て顯はれ玉へりとの事を確言せざるものならず。而して何人も耶穌は其使徒たるもの、爲に福音の力なりとの事を感じずんばならず。彼等は其實験せる處のもの、彼に依り、彼を通じて知りたるものを世に向て語りたりき、而して彼等の世に傳へたりし處のものは、今日に至りても尙生ける勢力たる也。

以上は即ちハーナックが解釋せる基督の基督論也。彼の著書に對せる攻撃の矢は實に此一點に集中せる也。昨年六月柏林に集會せる牧師會が全會一致を以て彼の著書を排撃せる決議案を通過せるも其論據實に此處に在るが如し。其決議案の大意に云く「ハーナック教授の『基督教の本質』は其著作の目的甚だよしと雖も議論の内容に至ては或は唯理説に陥り、或は基督教の本質を誤り、歴史の意味を曖昧ならしめ、適當に人類の必要を解説することなし、故に本會は宗教改革者及び世々の忠誠なる基督教徒と共に、神の子基督は福音の要素にして、基督教の中心點なるを認め、神の獨子、我等の主なる耶穌基督を信すと告白す云々」と。

吾人も亦ハーナックの基督論に就ては同意を表すると能はざるものなり。彼は耶穌は其福音に於て重要な地位を占め居れりとの事を自ら主張せずといふと雖も、是れ果して正當に福音書を解釋したるものなるか、吾人甚だ之に疑なきと能はず。要するにハーナックの此點に關する議論は頗る曖昧にして、要領を得ざるものあり。吾人は今爰に詳細に之を批評するの暇を有せず。唯讀者が著者の説に欺かるゝ勿らんことを一言するを以て足れりとすべし。

(廿二)

福音と教理との關係即ち信仰箇條の問題

吾人は此問題に關しては長く議論するの必要なし。何となれば吾人は既に以上述べたる處に依り、緊要なる事項を觀察したれば也。

福音は教理の理論的系統に非ず。又哲學にも非ず。唯父なる神の實在せることを宣言する限りに於て之を教理也といふべし。福音は永遠なる生命に就て吾人に語り、又如何なる事が吾人の爲すべき事なるやを吾人に告ぐる喜びの音信也。永遠の生命に就て語る事に於て福音は吾人

に如何にして吾人は正しく生活すべきやを教へ、又吾人に人の靈魂を
遜慈悲清潔及び十字架の貴重なる事と、世の財寶の價值なき事と、及び
此世の幸福の爲に其心を煩はすことの愚なる事を告ぐる也。又福音は
吾人に苦悶奮闘の中に平和あり、安心あり、朽つ可らざるものあり、此
の如くして正しき生活を爲せるものは生命の冕を得べしとの確信を
與ふる也。神は父にして、吾人に應報を爲し玉ふべしとの確信を以て神
の聖意を爲すと云へる事の外、「信仰箇條」なるものは何の意義を有す
るや。耶穌は之を外にして「信仰箇條」なるものに就て語り玉はばりし也。
彼が「凡そ人の前に我を識ると言はん者を我も亦天に在す我父の前に
之を識ると言はん」と云ひ玉ひし時さへ、彼は單に彼が行ひし如く行へ
る人々に就て云へるのみ。彼の所謂告白は感情と行爲に顯はるゝ所の
告白のみ。福音の前面に基督論的信仰箇條を置き、人は基督に來る前に
先づ基督に就て正しく考へざる可らずと教ふるは如何に基督の思想、

教訓と相距ること遠きぞや。是れ實に馬前に車を附するものにして、前
後を顛倒せるもの也といふべし。人は唯基督の福音に従ひ生活するこ
とを得て後初めて基督に關し、正しく考へ、正しく教ふることを得べし。
基督の教訓には人の先づ通過せざる可らざる玄關もなければ、人の先
づ負ふべき輓なるものもなし。福音の吾人の爲に供ふる思想と保證と
は初にして又終なり、各人は直接に其前に立ざる可らず。

福音は自然に關しては一定の智識を豫想するものに非ず、又此の如き
智識と關係を有するものにも非ず。福音は宗教也、故に其關する所は道
徳的要素也。福音は吾人の前に生ける神を置く、彼を信すること、彼の
聖意の必ず遂げらるべき事を信することは吾人の告白すべき唯一の
信仰にして、耶穌基督の求め玉ひしものも之に外ならず。此信仰に其基
を置くの智識は人の内的發達と主觀的能力の度に從て常に變化す。然
れ共吾人の最も重要な經驗は天地の主を父として有する事にして、

此經驗は最も貧しきものと雖も尙之を有すべく、又其眞實なるを證明し得べし。

吾人の告白すべきものは吾人が自ら實驗したる宗教是也。此實驗を外にしては凡ての信條告白共に耶穌の眼より之を見れば偽善也。吾人は福音の中に宗教の廣濶なる理論を發見すること能はず。況や或る既成の理論を先づ承認し、告白せざる可らずとの命令をや、信仰と信條とは吾人が世より神に向はんとする行爲より發生し、成長するものにして、信條とは畢竟信仰の行爲に化したるものに外ならず。使徒保羅云く、「人は皆信仰を有せず」と。然れども吾人は唯唇にて神に事へ、若くは唯浮きたる心を以て信條を守るが如きこと勿らん爲め、誠實正直にして吾人の宗教に忠義ならざる可らず。基督吾人を戒めて云はずや、「或人二人の子ありしが長子に來りて云ひけるは子よ、今日我が葡萄園に往きて働け、答て否と云ひしが、後悔て往きたり、又次子にも前の如く云ひけるに、

答へて君よ我往くべしと云ひしが、遂に往かざりき」と。

余は爰にて擱筆せんとすれ共、尙一の反對説に答辨せざる可らず。或人云く福音は至大至高にして、世を救ふの力を有したりし事疑ふべからず。然れ共不幸にして福音は既に陳腐となりたる世界及び歴史觀と離る可らざるの關係を有せり。故に今日吾人は未だ之に代はるものを有せずと雖も、兎に角福音は既に其力を失ひ、吾人に對しては最早何の效驗をも有せざる也。此反對説に對し余は二箇の云ふべきものあり。第一、福音の關係せる世界及び歴史觀が吾人の今日有するものと相異り、再び之を回起せしむる能はずとの事は疑もなく眞實也。然れども此關係は決して離すべからざるものにはあらず。余の既に論じたるが如く福音には根本的要素なるものあり、此要素は時に關せざるもの也。且福音の相手たる人も時に關せざるもの也。換言すれば福音は進歩發達の中に在りて其内的本質を變せず、又外界との根本的關係を變せざる

人を相手とする者也。故に此福音は今日吾人に對しても其効驗依然として變ずることなき也。

第二福音は靈と肉、神と世、善と惡との對立の上に立てるもの也。多くの思想家は嘗て非常なる熱心を以て一元的基礎の上に倫理の説を立てんと苦心したれ共未だ人心の深奥なる要求を満足せしむること能はざりき。思ふに今後も長く成功するとあらざるべし。然らば即ち吾人は此反對に如何なる名を附するも之を神と世、此世と彼の世、見る可きものと見る可らざるもの、物質と精神衝動の生活と自由の生活、物理と倫理と名くするも事實に於て相違あることなし。而して此反對の下に一致調和存在せりとの事は吾人が經驗に依りて得べき確信也。然れ共此一致は兩者相争ひて此彼に克つに非ざれば達し得べきものに非ず。此一致の達せられたる時は即ち此問題の稍々解釋せられたる時也。然れ共是決して機械的經過に依て達せらるべきものに非ずして、吾人が物質

の權力を遁れんとせば自ら之に打ち勝たざる可らず。

克己の人は凡ての物を束縛する力より

己れを自由にする者なり

ゲーテの此語は最もよく此點に關する眞理を道破せるもの也。且此語は何れの時代にも眞實にして、且福音の記されたる時代の生活に於て大切なる要素となれるもの也。余は吾人が自然に關する智識の増加は如何に吾人が「此世と其慾とは逝るものにて神の旨を行ふ者は永遠といまる也」と云へる眞理を證するの妨害となれるやを知らず、吾人は兎に角二元と關係せざる可らず。吾人の其如何にして起れるやを知らず、然れ共是れ吾人が自ら之に勝ち、之をして致一に歸せんため與へられたるものなるが故に、又其本來の致一に歸し、而して遂に實現せられたるに於て調和すべきもの也。とは吾人が道徳性を有するものとして承認する所也。

或は云く是れ夢想のみ、吾人が眼前に見る所のものは是と甚だ異なるもの也。否、是れ決して夢想に非ず。吾人真正の生命の根源は實に愛に在り、然れ共是れ正に補綻物也、何となれば吾人は空間及時間に於て、吾人の知識及び内的生命の内容を宇宙の哲學的理論の致一に歸するこゝと能はざれば也。此致一を吾人に望ましむるものは唯吾人の領解に勝る神の平安のみ也。

然れ共吾人の企てたりしは福音の根本的眞理と其最も重要なる關係とを知らん事なりき。而して吾人は既に此事を爲せり、吾人の最後に述べたりしものは本來の目的以外に出でたり、今吾人は其目的に歸りて歴史に於ける基督教の行程を觀察すべし。

(廿三)

使徒時代に於ける基督教 (一)

ハイナックは既に其書の前半に於て耶穌の基督教は如何なるものなるやに就て觀察したり。此書の後半は使徒時代より今日に至る迄基督教が如何に發達したりしやを觀察せるもの也。

著者は先づ使徒時代の基督教を論じ、初代の教會は三箇の要素を有したりしとの事を述べたり。三箇の要素とは即ち(一)耶穌を生ける主として承認したりし事、(二)基督教會員に在ては奴隸に至るまで宗教彼等の實驗となり、各々神と生ける致一を得たりとの意識を有したりし事、及び(三)神聖なる生活をなし、且基督の再來近きに在るべしと信じたりし事是也。以上三箇の要素は即ち初代基督教會の特質を示すもの也。著者は進んで此等の要素に就き細論したり。吾人は左に之れを紹介すべし。

一、主なる耶穌基督、耶穌の弟子等は先づ彼を主と信するの信仰を告白し、彼を以て權威を有する教師となし、彼の言を以て彼等永遠の生命の標準となして之を承認し、彼が彼等に命じたる凡ての事を守るべしとの希望を表白せり、然れ共是れ未だ「主」なる言語の有する意義を充分に發表せるものに非ず、否彼等が殊に言はんどせる意義を去ること尙甚だ遠し、蓋し初代教會が耶穌を主と呼びたりし所以のものは彼が彼等の爲めに其生命を棄て、死より蘇りて神の右に坐し玉へりとの事を確信したれば也、初めて基督の死及び其蘇生の重要なる事を明示したりしは使徒保羅に非ず、彼は唯之を承認することに於て初代使徒と同一の立場に立ちたりしに過ぎざりし事は最も確實なる歴史的事實也、彼れ哥林多の教會に書を與へて云く「我が爾曹に傳へしは我が受し所の事にて其第一は即ち聖書に應ひて基督我儕の罪の爲に死又聖書に應ひて葬られ第三日に甦へりし事也」と、保羅が基督の死と蘇生とを以て

其特殊なる思辨的思想の題目となし、此等の事件を以て福音の全体となしたりしは事實也、雖も此等の出來事は既に初代使徒及び教會の根本的事實也として承認せられたりし處なりき、耶穌基督が初めて永遠の承認を得、尊敬と崇拜を受くるに至りしは此二箇の事實に基けりといふも過言に非ざるべく、此等のものは實に基督論的理論の依て立てる基礎也といふべし、然れ共耶穌基督は其死後未だ二代を経ざるに既に最高なる地位に置かれたり、人々は彼を以て生ける主となすが故に、彼は神の右に擧げられたるもの、死に勝てるもの、生命の君、新生の力、道、眞理、及び生命として崇められたりき、メッシヤ的觀念は唯一神教を害することなくして彼を神の位に置くことを得べし、然れ共彼は之れのみならず、更に各人各個生命の原動力として承認せられたり、云く「我れ生くるに非ず、基督我に在て生くる也」と、又云く「彼は我が生命也、死に依りて彼を得るは大なる利益也」と、吾人は人類歴史の何處にか其主と

共に飲食し、彼の人間たる特點を認め、而して之を以て唯に大預言者、大教師となすのみならず、歴史の主治者、萬物の創造者、新生命の源と仰くが如き例を求むるを得んや。マホメットの弟子等が其預言者と仰くものに就て語れるは此の如くならざりき。或は云く是れ唯メツシヤの觀念を耶蘇に移したるのみ、彼等が耶蘇は榮光を以て再來すべしとの希望を有したりしとの事を見れば、思半に過ぐるものあらんと。然れ共此の如きは未だ以て此事實を解釋するに足らず。耶蘇の再來を望めるが爲に其謙虛卑賤にして來れる事實の看過せられたりしといふは眞也。然れ共彼等が斯の如き希望を有し、而して堅く之を把持したりし事、耶蘇の苦難と十字架の死ありしに拘はらず、彼等が彼を以て約束せられたるメツシヤ也と思惟したりし事、彼等のメツシヤに關する觀念は甚だ物質的なりしに拘はらず、尙彼を以て主となし、救主となしたりし事、此等の事は實に驚くべき事に非ずや。蓋し彼等をして耶蘇の人格に依り

與へられたる信念を堅ふせしめ、最も堅固に斯る信仰を把持せしめたる所以のものは彼が「我儕の罪の爲に」死し、而して後蘇り玉へるに依らずんばならず、然り、彼は我儕の犠牲となりて死し、而して今尙生存し玉ふ也。

然るに今日多くの人は此等の事實を以て寧ろ奇異なる出來事となし、從て之に對し無頓着の態度を取るに至れり。即ち彼の死に對しては斯る深遠なる意味の附せられ得べきものに非ずとの理由を以て、蘇生に對しては斯る事のありしとは信じ得べき事に非ずとの理由を以て、冷淡に附するに至れり。

耶蘇の死と蘇生とに關し、彼等の有したりし意見を辯證せんば、吾人の務に非ず、然れ共歴史家たるものは此等の事實に關して、其會て有し、今尙有する意義を十分に理解せざる可らず。此等の事實が初代教會に在てば最も重要なるものなりし事は、何人も之を疑ふものなし、ストラウ

スも尙且之を疑はざりき。大批評家フアイジナンド、クリスチヤン、パワ
||も初代教會は此信仰の上に建設せられたりしとの事を承認したり
き。然らば此等の事實の意義果して如何之を了解するは吾人の爲し得
難き事に非ず否、吾人若し宗教の歴史を探りて其根底に至らば、其表面
に於ては信すべからざるが如く見ゆるものも、尙其信仰の根柢に正當
なる眞理を有するものあるを發見すべき也。

吾人をして先づ耶蘇十字架上の死は贖罪の死なりしとの思想に就て
考察せしめよ。吾人若し「贖罪の死」なる言語に附着せる思想を思辯的の
範圍に於て考察せんとせば、吾人は是れ自ら岐路に彷徨するものにし
て、此思想を了解するの機會を失ふべし。吾人もし神は何の必要ありて
斯る犠牲を要し玉ひしやに就き、徒に思辯的論辯を弄せば、吾人は是れ
極端に走れる也。吾人は先づ犠牲を神に献ぐるの一事は人類全般の宗
教歴史に普遍なる事實也との事を記憶せざる可らず。耶蘇の死を以て

犠牲的也と思惟したりしものは直ちに神に犠牲を献ぐることを感し
たり。斯る犠牲なるものは果して價値を有すべきものなりやとば數代
前より既に疑はれたる處にして、之を献ぐるの習慣は漸次衰頽しつゝ、
ありしが、今や此習慣は全く廢止せられたり。素より斯る習慣は一時に
止みしには非ずと雖も、其全然廢止に歸するや甚だ速にして、エルサレ
ム神殿の廢滅後は全く其痕跡を止めざるに至れり。而して爾後基督教
の傳へらるゝ處には祭壇は壞たれ、犠牲を賣るものは顧客を見る能は
ざるに至れり。若し宗教歴史に一事の確實なるものありとせば、基督の
死が凡ての犠牲を廢滅に歸せしめたりしとの事は是也。而して犠牲の思
想が深奥なる宗教的觀念に根せりとの事は此思想の多くの國民中に
存在せるに依て明也。而して是れ冷淡盲目なる倫理說に依て論斷すべ
きに非ず、宜しく活潑々地の感情に依て考察すべき也。若し果して犠牲
の念は宗教的必要に出づるものにして、基督の死によりて此要求を滿

足せしむることを得たりとせば、而して又吾人が希伯來書に見るが如く「彼れ一の獻物を以て潔まる者を永遠全成す」との明白なる證言ありとせば、吾人は基督の犠牲を以て奇異なる觀念也となすこと能はざる也。彼の死は實に贖罪的犠牲の價值を有したりき。然らずんば之に依りて人心の要求を満足せしむること能はざりしなり。然れ共基督の犠牲は他の犠牲と同意義に非ず。若し同意義なりしとせば何ぞ之を廢滅せしむるを得んや。然り、基督の死は凡て物質的犠牲を廢棄せしめたり。初代の基督教徒は凡ての犠牲の廢棄せられたるを知り、人もし之に向て其理由を問ふものあれば彼等は基督の死を指して之に答へたりき。

(廿四)

使徒時代に於ける基督教 (二)

何人にては歴史を學ぶものは純潔正義なる人の苦難は救済の要素たるを發見すべし。換言すれば歴史上大進歩の歸着點を爲すものは言語に非ずして事業也。唯に事業のみに非ずして犠牲的事業也。唯に犠牲的事業のみに非ずして生命さへも措かずして獻ぐる事也。此の意義に於て余は信ず、吾人は假令代贖の或る教理を信する能はざるにせよ、以賽亞書第五十三章に記せる「誠に彼は我儕の病患をおひ、我儕の悲しみを擔へり」と云へるが如き言の眞意を誤解すること能はざるを「人其朋友の爲に生命を棄つ、之より大なる愛はなし」耶穌の死は初めより此意義に於て了解せられたりし也。凡そ歴史上大事業の成されたる場合に在ては人の道徳的感情純清なるに従ひ益々其犠牲的苦難を感すべく、又其苦難を以て益々自己と關聯せしむるに至るべし。ルーテルは其庵室に在りし時唯自己の爲に苦戦したりしや、彼が傳說的宗教と戦ひたりし時苦悶したりしは吾人萬衆の爲に非ざりしや、人類が純潔と愛の力

を實驗し、而して此實驗に由りて其歴史の新紀元を開くに至れるものは實に耶穌基督の十字架に依らずんばあらざる也。

且夫れ理性の反省と智識の考察とは人類の道德的觀念より不義と罪とは罰せらるべく、義人の苦めらるゝ處には吾人を純潔たらしむる贖罪の行はるもの也との確信を塗抹し去ること能はざる也。此確信は現象世界以外の世界より來るものにして、吾人は到底之を透徹し得可らず。或は此眞理は既に久しき以前に於て亡滅せしかの如く輕蔑せられ、否認せられたりしかども、今日も尙人間の道德的實驗に存在せる也。此等の觀念は基督の死に由りて起れるものにして、最も力あるもの也。而して此觀念は基督は其苦難と死とに由りて吾人の爲に確實なる事業と爲し玉へりとの確信となるに至れり。吾人若し耶穌が自ら其死を以て多くの人の爲になしたる事也となし、而して人々が長く之を記憶せん爲に嚴肅なる禮典を立て玉へるを考察せば、吾人は彼の死と十字架

が如何に其中心を占むるに至りしやを了解し得べき也。

然れ共耶穌の『主』として崇められたりしは唯に彼が罪人の爲に死し玉ひしが故のみに非ずして、又彼が死より蘇り玉ひしが故也。若し復活とは血肉を備へたる死体が再び生命を有するに至りしとの外何等の意義をも有せざるものなりとせば、是れ此傳説の意義を失はしむるもの也。然れ共是れ左に非ず、新約全書は耶穌の墓に何物もなく、彼れ其弟子等に顯はれ玉へりとの消息と復活の信仰との間に區別を立てたり。假令此消息には最大の價值を附せられたりと雖も吾人は此消息なきも尙復活の信仰を把持せざるべからず。トマス^{トマス}の物語は吾人は假令復活の消息なきも尙復活の信仰を有せざるべからずとの事を吾人に教へんどの目的を以て記されたるもの也。云く、「爾我を見しに依りて信す、見ずして信する者は福也」と。エマヲ^{エマヲ}途上の弟子等は復活の消息尙達せざる時之を信せざるを以て耶穌の譴責を蒙りたりき。保羅云く、主は靈也。

と、此語は即ち復活の確實なるを云へる也。復活の消息は吾人に語るに、アリマタヤヨセフの園中に於ける驚くべき出来事と、數人の婦人と弟子等は耶穌を於ける墓を見たりしに其墓に何物をも見ざりし事と、主は其弟子さへも直ちに承認すること能はざりし榮光の体を以て蘇り、其弟子に顯はれ玉ひし事と、而して蘇りたる主の語り玉ひ爲し玉ひし事とを以てせり。此消息は益々完全となり、益々信任せらるゝに至れり。然れ共復活の信仰は十字架に釘けられたる耶穌が死に勝ちたりとの事、神は正しくして且力ある者なりとの事、及び耶穌は萬人の長子にして今尙生存し玉へりとの事の信仰也。保羅は此復活の信仰を第二の「ダムは天より來れりとの確信と、ダマスコに往く途上に於て神が其子を生けるものとして彼に顯はし玉へりとの實驗に置けり。彼れ云く、神は耶穌を「我」に顯はし玉へり。而して此內的顯現は之に伴ふに後會て在らざりし至大の幻象を以てせり。保羅は耶穌の墓に何物をも見ざり

しとの消息を知りたりしや、有名なる神學者の中には之を疑ふものありと雖も余は其然らんことを信するもの也。然れども吾人は此事に關しては確實なる事を知ること能はず。保羅及び其他の使徒等が最も重要なるものとなしたりしは墓の空しかりしとの事に非ずして、基督の顯現し玉ひしとの事なりしは、兎に角確實なる事實也とす。吾人の中誰れか是等顯現の事實は保羅及び福音書記者等の語れる物語より案出せられたりと云ふものぞ。若し此事實にして在り得べからず、又之に關して信據すべき傳説なしとせば、復活の信仰なるものは如何にして此等の事實に其根據を置くことを得たりしや。吾人は此に於て不確實なる根據の上に吾人の信仰を置くか、然らずんば全く此根據を棄て、凡て奇跡的事實なるものを拒否せざるべからず。然れ共吾人の信仰なるものは此處にも眞實確固たる根據を有する也。基督を葬れる墓に於て、又基督の顯現したりしとの事に於て如何なる事件の起りたりしにせよ、

此一事は甚だ確實也、即ち此墓は死は敗れ、永遠の生命は在りとの確信の生れたる場所也。この事は也、吾人は必ずしもブラドローを引くを要せず、波斯の宗教若しくは猶太教の思想、文學に訴ふるを要せざる也。凡ての物は滅亡すべく、又既に滅亡したり、然れ共基督復活の確實なる事は湮滅すべからず、吾人が永遠の國の民たる希望なるものは實に耶蘇今尙生くとの確信の上に立てる也。希伯來書記者の云へる如く、彼は實に「死を畏れて生涯のながるゝ者を放ち玉へり」是れ即ち重要なる點也。而して靈魂無限の價値の信せらるゝ處、死其恐れを失へる處、現世の苦難未來の榮光に依りて計らるゝ處には、此生命に關する感情は耶蘇基督は死より蘇り玉へり、神は彼を蘇らせて、生命と榮光とを與へ玉へりとの確信に伴ふ也。吾人は最初の弟子が生ける神を信せる信仰の終極的基礎は彼より出てたる力なりとの事を信するの外更に何事を信じ得べきや、彼等が彼より出でたりと思惟せしものは永遠滅亡すべから

ざる生命也。彼の死は靈時の間彼等を狐疑せしめたりき、然れ共主の力は凡てに勝たり、神は彼を死の中に棄て玉はざりき、彼は眠れるものゝ初の果として生き玉へり、人類が永遠の生命の確實なるを信するに至りしは哲學の思辨的觀念に依るに非ず、耶蘇が此世に生れ、死して蘇へり、長く神と調和致一し玉ひしを見しに依らずんば、あらず、而して此感情は先づ個人的生命の價値に於ける信念の基となれり、然れ共論理的方法に依りて靈魂不滅の確實なることを證せんとする企劃に對しては吾人はグーテと共に

信せよ、試みよ、證據に關しては神何物をも與へ玉はざる也、

と云ふべし。生ける主と永生に於ける信仰は神より出でたる自由の動作也。

耶蘇は此の如く十字架に釘けられ、死して蘇りたるものとして主なり

さ彼に於ける此信仰の告白は彼と信徒との關係を表白せると共に又種々の思想と思辨とを産み出したるなり。耶蘇は「主」也との此思想はメツシヤ及び之と均しき舊約の預言の多方面を包括するに至れり。然れ共彼に關する教會の教理なるものは此時未だ按出せらるゝに至らず、彼を主として承認するものは何人も基督教會に屬することを得たりしなり。

ハーナックが基督の復活に關する思想は以上述べたるが如く、所謂正統教會の信仰と相違せるものあるを見るべし。然れ共其相違なるものは歴史的證據の價值に關し、其復活の信仰には關せず、彼は明に耶蘇尙生けりとの信仰は吾人凡ての希望の基礎也との事實を承認する也。歴史的批評家たる著者が斯かる意見を有するは讀者の注目すべき事實也とす。

(廿五)

使徒時代に於ける基督教 (三)

二、實驗としての宗教、初代教會第二の特質は信徒たるものが奴隷に至るまで各自神に關し生ける實驗を有したりし事是也。是れ實に著しき事實也。彼等が基督に對し無限の尊敬を有したりしを見れば、彼等は必ず彼の言語に對し無限の服従を爲し、心より之が奴隷たるを甘するに至りしなるべしとは何人も想像する所なるべし。雖も保羅の書翰と使徒行傳とは全く異りたる事實を吾人に供する也。耶蘇の言語が非常なる尊敬を以て保持せられたりしとの事は此等の書冊の証明せる所なり。雖も此の事實は初代基督教會に於て最も著しきものに非ず。之れよりも更に著しきは基督信徒が各自神の靈に依りて神自らと生ける親密なる關係を有したりし事是也。